卒業研究

芥川龍之介「六の宮の姫君」研究

人文学部人間文化課程
11H1067　神冴香

芥川龍之介「六の宮の姫君」研究

序論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.1

第一章　作品構造からみる芥川のねらい・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.3

　　第一節　原話について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.3

　　第二節　原話の改変部分・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.6

　　第三節　他の説話の挿話・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.9

　　第四節　芥川のオリジナル・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.12

第二章　六の宮の姫君について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.16

　　第一節　男と出会うまでの姫君・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.16

　　第二節　男との婚姻と別れ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.20

　　第三節　男を待つ姫君・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.23

　　第四節　姫君の臨終と後日譚・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.26

第三章　「六の宮の姫君」の背景について・・・・・・・・・・・・・・・・・p.30

　　第一節　先行研究について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.30

　　第二節　女性と時代背景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.34

　　第三節　芥川龍之介について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.38

結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.45

註・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.47

参考文献一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.51

序論

「六の宮の姫君」は、大正十一年八月一日『表現』第二巻第八号に発表された。六つの小節から成り立つ短編小説であり、芥川龍之介が三十一歳の時に執筆した作品であって、通常は、芥川が『今昔物語集』などの説話に取材して書いた歴史小説群、いわゆる王朝もの[1]小説の最後の一つとして位置付けられている。

粗筋は次の通りである。土地の名前に拠って六の宮の姫君と云われた高貴な生まれの姫君は、昔気質で時勢に遅れがちな父母のもと、悲しみも知らないと同時に喜びも知らない生涯を送っていた。しかし両親没後、頼りは乳母一人となり、生活は次第に苦しくなっていく。姫君は乳母の勧めに従って丹波の前司の妻となるが、それは不如意な暮しを扶けるために体を売るのも同様であった。けれども男との逢瀬を重ねるにつれて姫君は、悲しみも少ないと同時に喜びも少ない安穏な日々の中にはかない満足を見出すようになっていく。しかしそのような中、男はある日唐突に父の陸奥守任官の伴として京を離れねばならない旨を姫君に告げたのち、五年後の再会を約束して陸奥へと旅立つのだった。

旅立ちから六年目の春がめぐっても男は帰らず、姫君の生活は逼迫していった。そこで乳母が再婚をすすめるが、姫君はただ静かに老い朽ちたいと願ってそれを拒絶した。同じ頃、男は父の意に沿った新しい妻と共にいたが、姫君のことを忘れかねていた。

別れから九年目の晩秋になってようやく男は上京し、急ぎ六の宮を訪問するが、そこは廃墟と化していて姫君の姿は何処にもなかった。男は出会った老尼から別れた後の姫君の辛い暮らしぶりを聞き出し、翌日からは姫君を探して洛中を歩き回った。そして何日か後の夕暮れ、雨を避けるため立ち寄った西の曲殿の軒下で、男は偶然にも病に伏す姫君とそれを看病する乳母の二人を見付け出した。男は姫君にかけよるが、姫君は何かかすかに叫んだきり、男に抱かれたまま死んでゆこうとする。慌てた乳母が臨終の姫君のため、居合わせた乞食法師に読経を頼むと、法師は応じ、姫君に自身で念仏を唱えて往生するよう諭した。姫君は細々と仏名を唱え出すが、恐ろしそうに天井を見つめたのち、突然火の車が見えると言いだす。そして次には金色の蓮華が見えると夢うつつのように呟き、更にはその蓮華も見えなくなったと切れ切れに言った。法師は叱るように念仏を勧めるが、姫君は「何も、――何も見えませぬ。暗い中に風ばかり、――冷たい風ばかり吹いて参りまする。」と言い残して息絶えてしまう。

姫君の死から何日か後の月夜の晩のこと、朱雀門の前で蹲る法師に一人の侍が声をかけた。どうやらこの頃、朱雀門のほとりに女の泣き声がするという噂があるらしい。すると法師は侍に「お聞きなされ。」と一言返事をした。その時、突然どこからか女の声が細々と嘆きを送り、またどこかへと消えていった。「あれは極楽も地獄も知らぬ、不甲斐ない女の魂でござる。御仏を念じておやりなされ。」と法師は語るが、ところが侍は返事もせず、法師の顔を覗き込むやいなや、いきなりその目の前に平伏した。実はこの乞食法師は、世にも名高い内記の上人であり、やんごとない高徳の沙門であった。

以上が「六の宮の姫君」の粗筋であるが、従来この作品は典拠となった説話からの独立性がしばしば問題視されおり、時には評価が極端に分かれて対立したこともあった。今日に至ってはある程度の作品としての自立性は認められるという内容に落ち着いているものの、小説の主人公である姫君についての評価としては、多くの先行研究が、はっきりとした主体性をもたない「腑甲斐ない女」であるとみなして、その人生の愚かさを論じる傾向にある。そして、姫君の生涯を描いたこの物語は、芥川の創作意欲の行き詰まりを象徴するものとして広く認識されているのであった。

ところがこの作品は、発表の翌年には第六短篇集『春服』(2)（大正 12.5.18）の巻頭に掲載され、またその更に二年後にも、自選による『芥川龍之介集』(3)（現代小説全集第一巻、大正 14.4.1）の巻頭に収録されている。芥川の創作集の巻頭に置かれた作品がいずれもその時期の会心作であったことを踏まえると、代表作を網羅した全集の冒頭に、「六の宮の姫君」が再び置かれたという事実は一考を要するものだろう。さらに芥川は、知人に宛てた手紙の中でも姫君についての言及を行っており、同時期に執筆した「一夕話」（「サンデー毎日」大正 11.7）に登場する女性と姫君とを比較して、自らの意見を述べている。また、他の短編作品である「文放古」（「婦人公論」大正 13.5）の中においても、再び「六の宮の姫君」の話題を取り扱ってみせたのである。察せられるに、少なくとも当時の芥川にとって「六の宮の姫君」は自信作に等しく、また大事に扱おうと意識するほどに特別な作品であったのだ。つまり芥川は、この作品に何か大きな意味を見出していたのである。そのように考えるならば、従来の作品の評価は芥川の思惑とは全く無縁のものであるといわざるを得ないだろう。

それではこの小説は、芥川にとって一体どのような意味をもっていたのだろうか。作品を読んでみると、これまでの評価に反し、主人公である姫君には何かしらの自立した意識があるように感じられた。この小説に描かれた姫君の死は、単なる「腑甲斐ない」女性としての死なのではなく、より何か大きな意味をもった、芥川の思惑を内包する死なのではないだろうか。作中の姫君の心情について考察し、姫君の死とその最期にみた「暗い中に風ばかり」吹く光景が何を意味するものなのかについて明らかにしたならば、芥川の思惑にも一歩近づけるように思われる。

よって本論考においては、まず作品の構造をみることで芥川の創作意図に迫ることとし、次に小説の内容を具体的に検討することで姫君の言動に隠された真意を読み解き、この作品がいったい何を描こうとした作品なのかについて、考えることとしたい。そして最後には、作品に込められた芥川の思惑を推測した上で、「六の宮の姫君」が芥川の創作活動の上でどのような意味をもっていたのかについて、考察を試みたいと思う。

なお、本論考で扱う「六の宮の姫君」は、筑摩書房が出版する『芥川龍之介全集 5』を引用した。

第一章　作品構造からみる芥川のねらい

「六の宮の姫君」には複数の典拠が存在する。この小説は、話の大筋として『今昔物語集』の一つの説話が用いられつつも、同時に他の二つの説話が部分的な素材として扱われおり、尚且つそこに芥川のオリジナル要素までもが組み合わされた上で、ひとつの作品として構成されている。そのような構造を成す作品であるからこそ、これを読み解き芥川の意図に迫るためには、小説とその典拠となった説話との比較検討が先ずもって必要不可欠であろう。よって第一章においては、「六の宮の姫君」と原典の説話とを比較して両者の相違点を探ることで、執筆にあたっての芥川のねらいについて把握を試みることとする。

第一節　原話について

芥川が「六の宮の姫君」を執筆するにあたって主な材源としたのは『今昔物語集』巻第十九「六宮姫君夫出家語第五（ろくのみやのひめぎみのおっとしゅっけすることだいご）」であり、これについては先行研究でも早くから指摘がなされているため、もはや疑いようのないことである。以降、この説話を芥川の小説に対して原話と称することにする。それでは先ず、原話と芥川の小説との比較検討を試みるためにも「六宮姫君夫出家語第五」の粗筋を以下に記述する(4)。

六の宮と云うところに、世に忘れられた宮方の子で世間との交わりをもたない人が住んでいた。その人には見目麗しい娘が一人いたが、しかし古風な人柄と貧しさゆえに、娘のため夫を求めることも入内させることもできずにいた。乳母はとうてい信頼できそうにない人物で、また姫君には兄弟すらいなかったため、父母は娘を不憫に思って嘆くより他になく、そのうち儚くこの世を去ってしまった。一人残された姫君は、乳母に気を許すことができず、かといってどうすることもできないまま心細く悲しい思いをしていた。

そんなある日のこと、乳母が姫君に前司の息子から婚姻の申し出があることを告げて、その男の妻になるよう勧めた。これを聞いた姫君は髪を振り乱して泣き、乳母が取り次いだ男からの便りを見ようともしなかった。けれども乳母は、侍女に姫君が書いたと思われるような返事を書かせて男に渡した。このようなことが何度か重なって、やがては男が姫君を訪問する日にちも定まってしまったため、姫君も仕方なく男と契りを結んだ。頼りにする者もないままに、姫君は男を頼りにして日々を過ごす。しかし男の父親が陸奥守に任じられたために、男も父の伴で京を離れることが決まった。男は、公然と親の許しを得た仲ではなかったために姫君を連れて行けず、将来を深く約束すると泣く泣く別れて陸奥へと下った。任国に着いた男は京の姫君のもとへ便りを出そうと思うがその伝手もなく、嘆きながら過ごしているうちに年月も流れていった。

父の陸奥守の任期が終わると男は上京の支度を急ぐが、男を娘婿にもらいたいという常陸守の要望を父が承諾したために、男は常陸国に留まることとなった。新たに迎えた妻は若く魅力に富んでいたが京の姫君とは比べものにならず、男は常に京へと思いを馳せていたがどうにもしようがなかった。そのうちに上京の機会が訪れ、男は急ぎ六の宮へと向か

うがそこは廃墟と化していた。胸騒ぎを覚えた男は姫君の行方を知る者を探しはじめ、屋敷の崩れ残った所に住む尼と遭遇すると、それがかつて下働きをしていた女の母であることに気づいた。尼から自分が去った後の姫君の暮らしぶりの一部始終を聞き出した男は、悲しい思いに沈みながら一旦帰宅するのだった。

姫君に会わなければ生きている気もしないので、男は姫君を探して京を歩き回った。そして雨宿りのために訪れた朱雀門の前の西の曲殿の下で、偶然にも老尼と、そしてぼろ布を纏って寝る姫君を見付けた。姫君の詠む歌を聞いた男が、呆然とした思いで姫君に駆け寄りその身を抱き上げると、姫君は男の素性に気付き、恥ずかしさに堪えられなかったのかそのまま気を失って息絶えてしまった。暫くは姫君が生き返らないかと抱いていた男だが、諦めるとそこから家にも帰らずに愛宕山に行って法師となった。出家というものは、いまにはじめぬ遠い前世からの因縁のあることなのである。この話は詳しく語り伝えてはいないが、『万葉集』という書物に載せられているため、こう語り伝えている。

以上が原話の粗筋であるが、ちなみに原話の収められている巻第十九は「本朝付仏法」と題されており、その第一話から第十八話までの説話には全て「〜出家語」という名が付けられている。『今昔物語集』の編者にとってみれば、原話もまた周辺に並べられた説話群と同様に、出家機縁説話として読まれることが期待された話であったのだろう。確かに原話は、男が姫君の死によって世俗を捨てる出家譚とみることが可能である。何より「道心発(だうしむおこり)ニケレバ、貴ク行ヒテゾ有ケル。出家ハ、于今(いまにはじめ)始ヌ機縁有ル事也」という末尾の文章が、この説話のテーマ性をより一層強めているとも考えられる。しかしながらこの原話は、果たして本当に出家譚として分類されるにふさわしい説話なのであろうか。

物語の始まりは姫君についての説明からであり、また、説話に唯一登場する歌を詠む人物も姫君であった。これにより、原話の中心が、薄幸な姫君の没落していく人生を語ることにあるのは明白である。けれども原話は姫君の死を描いた直後、唐突に男の出家を語りだし、最後には取って付けたように仏教的世界観を唱えて完結とするのであった。当初は姫君の物語を読み進めていたはずなのに、気付けば男の出家というかたちで話が無理やりきれいにまとめられてしまったのである。これでは読者も煮え切らない思いを抱えてしまうことだろう。原話の結末部分にみられる仏教の教義は、『今昔物語集』の編者によって、この説話を出家譚として配置するためにわざわざ書き加えられたのではないだろうか。

原話の最後は「此ノ事ハ委(くわ)シク語リ不伝(つた)ヘズト云ドモ、万葉集ニトモ云フ文ニ被注(しるされ)タレバ、此ク語リ伝ヘタルトヤ」という文句で締め括られている。つまりこの原話には他の更なる典拠が存在しているということであって、その説話の原型となった伝承については、『万葉集』巻第十六の次の箇所[5]が挙げられる。

夫君(つま)に恋ふる歌一首　并せて短歌

さにつらふ　君がみ言(こと)と　玉梓の　使ひも来ねば　思ひ病む　我が身ひとつそ　ちはやぶる　神にもな負ほせ　占部(うらへ)する　亀もな焼きそ　恋ひしくに　痛き我が身そ　い

ちしろく　身にしみ通り　むら肝の　心砕けて　死なむ命　にはかになりぬ　今更に君か我を呼ぶ　たらちねの　母の命か　百足らず　八十の衢に　夕占にも　占にもそ問ふ　死ぬべき我がゆゑ

反歌

占部をも　八十の衢も　占問へど　君を相見む　たどき知らずも

或本の反歌に曰く

我が命は　惜しくもあらず　さにつらふ　君によりてそ　長く欲りせし

右、伝へて云はく、時に娘子あり、姓は車持氏なり。その夫久しく年序を経れども、往来をなさず。ここに娘子、係恋に心を傷ましめ、痾痾に沈み臥せり。痩羸すること日に異にして、忽ちに泉路に臨む。ここに使ひを遣り、その夫君を喚び来す。すなはち歔欷き涙を流し、この歌を口号び、登時逝没りぬ、といふ。

言い伝えによると、ある時娘がいたが、その夫は長い年月のあいだ消息さえもたらさず、娘は夫を恋焦がれるあまり思い悩み、とうとう病に伏してしまった。娘は日ごとに痩せて死に瀕し、そこで使いをやって夫を呼び寄せたところ、再会にむせび泣きながらこの歌を詠んですぐ死んだ、という。

この『万葉集』の話に登場する娘の場合、長いこと男の帰りを待ち続けて苦しむ姿が描かれてはいるものの、最期は男と再会できた感動のままに命を終えるため、まだ救われた方であるといえる。ところが『今昔物語集』や類話の『古本説話集』(6) に登場する姫君の場合は、男の存在に気付かぬまま歌を詠み、さらには男との再会を喜ぶ素振りすらみせることなく息絶えてしまうのであった。そして、男の方は出家する。このような点において『今昔物語集』等の説話は『万葉集』と異なっており、姫君の人生の空しさをより一層漂わせているのであろう。つまり原話は、結末部分に仏教の節理を加えることによって、編者の意図に沿った完結の図られた説話であったと考えられる。

さて一方の芥川の小説であるが、こちらは出家というキーワードはおろか、姫君の死後に男が出家するという次第すら完全に削除されている。作品全体的な問題として、芥川の小説からは、原話に表れた出家のテーマを引き継ぐ意図が全く見受けられない。ここから推し量れるのは、芥川もまた、原話を読んだ際に姫君の物語が放置されたままであることに疑問を感じ、そのため自らの小説の中では物語の核となる部分のみを取り扱うことに決めて、原話とは異なるテーマで作品を仕上げようとした、ということである。では、その新たなテーマとはいったい何か。原話と小説を比較することで、その内容は物語の始まりから姫君の死に至るまで大筋が似通っているものの、しかし決定的に異なる箇所も複数みられることがわかる。そのような相違の箇所こそ、芥川が自分の思惑通りの物語を創り出すため、改変しないではいられなかった箇所ということになろう。つまりは原話との相違部分に、芥川の創作意図が強く反映されているということである。よって第二節では、原話との比較検討を行うことで考察を進めることとする。

第二節　原話の改変部分

原話との相違点を中心に作品をみてみると、第一に、原話では描かれていたのに芥川によって削除されたため、小説では全く描かれていない記述があることに気付く。何より先ず物語全体を通して気になるのは、原話に多くみられた男側視点の記述が、芥川の作品では大幅に削除されているという点であろう。一体どの程度の描写が小説では削除されているのか、先ずは原話に描かれた男側視点の記述を、以下に簡単にまとめてみる。

（A）男は父親の伴として離京することが決まると、妻を残して行くことが堪えがたく辛く思われたので一緒に連れて行きたかったが、公然と親の許しを得た仲ではなかったため恥ずかしくて口に出すことも出来ず、心の中で千々に思い悩みながら、いよいよ下るという日になって、将来を深く約束し、泣く泣く別れて陸奥へ下って行った。（B）任国に着くとすぐにも京へ便りをしようと思ったが、確実な伝手もなく、嘆きながら過ごしているうちにいつしか年月は流れてしまった。

（C）父の任期が終わった年に上京の途を急ぐが、当時任国で羽振りをきかせていた常陸守が男を娘婿に迎えたいと望み、陸奥守もそれを了承したため、男は陸奥国から常陸国へと移り住み、いつしか七、八年が過ぎていた。（D）常陸国の妻は若く魅力に富んだ女ではあったが、かの京の人にはとても比べものにならないので、男は常に京に思いを馳せ、日夜恋慕っていたがどうにもしようがなかった。（E）手を回して京に手紙をやってはみたものの、ある時は宛先が見当たらないといって手紙を持ち帰り、ある時は使いがそのまま京に留まったきりで返事を持ってこない。

（F）そのうち常陸守の任期が終わって上京することとなり、男は居ても立ってもいられない思いで道中を続ける。（G）日が悪いということで数日粟津に留まった間などは、今までの数年より一層おぼつかなさが募った。（H）京に入るや否や妻はその父の家に送り付け、自らは旅支度のまま六の宮へ急ぐ。（I）荒れ果てた有様を目にすると胸騒ぎを覚え、ひどく気がかりになって、その後に出会った老尼から姫君の話を聞くと、言いようもなく悲しい思いに沈みながら帰っていた。

（J）一旦帰宅したものの、この人に会わなければ生きている気もしないので、（K）姫君を捜して京を歩き回り、突如降り出した時雨を避けて朱雀門の前の西の曲殿で雨宿りをした際に、偶然にも老尼と姫君を見付け出した。（L）いぶかしく思って近づいてみると、自分の探し人であることに気が付き、目もくらみ心臓も止まる思いでじっと見つめていると、姫君は大変愛らしい声で歌を詠むので、呆然とした思いで近づき声をかけて抱き上げたところ、女はそのまま息絶えてしまった。（M）男はしばらくの間は「もしかしたら生き返るか」と抱いていたが、そのまま冷たく動かなくなってしまったので、もう駄目だと諦め、そこから家にも帰らず、愛宕護山に行き髻を切って法師になってしまった。

以上のように、原話の男に関わる記述は非常に多い。では芥川の小説はどうであろうか。小説では男についての記述、とくに心理描写を説明する部分が、大幅に削がれるかもしくは微妙にニュアンスの異なった表現へと改変されてしまっている。たとえば原話（A）の、

「妻ヲ見置テ行カム事ノ破無ク心苦シク」思って「心ニ思砕ケ乍ラ」姫君に別れを告げる男の必死な心境は、小説の方で著しく緩和されてしまい、「勿論姫君と別れるのは、何よりも男には悲しかった。が、姫君を妻にしたのは、父にも隠していたのだから、いまさら打ち明ける事は出来悪かった。男はため息をつきながら、長々とそう云う事情を話した。」と書き換えられたことで、読者は男側の切ない心理に共感するよりもむしろ何処か言い訳じみた印象を抱かずにはいられない。（B）の情報に至っては、完全に削除されたのであった。

続く（C）と（D）の描写は、男を待ち続ける姫君が再婚の勧めを拒絶したのと同時刻、新しい妻の傍らで何か音のするのを聞き、「その時なぜか男の胸には、はっきり姫君の姿が浮かんでいた」と説明するかたちに変化している。これによって読者は、男が何時の間にか再婚していたという事実のみを唐突に認識させられてしまい、男の姫君に対する気持ちを否応なしに疑うこととなる。その後の（E）の描写は珍しく小説でも原話と同様の内容であるが、（F）の情報はまたも完全に削除され、続く（G）は（E）の手紙が「一度も返事は手に入らなかった」事態を受けて、「それだけに京へはいったとなると、恋しさもまた一層だった」という説明内容になっている。

そして（H）と（I）および（K）は男の内面が排除された行動のみの説明に変わり、（J）の「此ノ人ニ不値ズシテ世ニ可有クモ不思ザリケレバ」という、おそらく男側の心境説明の中でも特に重要と思われる表記ですら削除されていた。また、姫君の臨終に至るまでの小説の（L）の部分では、「その姫君に違いない事は、一目見ただけでも十分だった。男は声をかけようとした。が、浅ましい姫君の姿を見ると、なぜかその声が出せなかった」として、男の姫君の身にふりかかった現実を受け止めきれずにたじろぐ様を新たに描きだしている。姫君の歌を聞いて「思わず姫君の名前を呼んだ」男は、死にゆく姫君を前にして慌てずにはいられなかった。そして既に指摘したように、姫君の死後（M）に男が出家するという語りは、小説のどこにも見受けられないのである。

こうして逐一検討してみたところ、どうやら芥川は、男のもつ弱さを浮き彫りにすることで、読者がそれを容易に察せられるよう意識していたと思われる。原話に登場する男は、「此ノ常陸ノ妻ハ若シテ愛敬付ナドハ有モ、彼ノ京ノ人ニハ可当クモ非ネバ、常ニ心ヲ京遣ツヽ、恋ヒ侘ブト云ドモ甲斐無シ」という文章から窺えるように、姫君ただひとりを何より強く思い慕う人物であった。そしてその反面、父親の力に逆らえず、立場の問題という枠組みからは抜け出せない悩める男として描かれていたのである。原話の事細かい説明描写によって、読者は男が姫君との別離のあいだにどれほど深く思い悩んでいたかを知るのだった。これによって、物語終盤の姫君の死という結末部分に至ってもなお、原話を読み進める読者の心に男を糾弾する心持ちはあまり生じず、それどころか男の出家する次第に一種の共感を抱く効果が発揮されていたのであろう。

けれども小説の方では、男の内面に関わる描写を削除することによって、男が姫君の事を特別常に想っているわけではない、という印象を読者に植え付ける。突然に離京を告げた揚句、姫君を妻としたことを父に隠していたから連れて行けないという説明を長々とす

るあたり、男の弱さを感じずにはいられないだろう。姫君との再会場面における、病に痩せ枯れた姫君を見付けた際の男の態度によって、その思いはより一層増してしまう。父親が任じられた陸奥の守の役職は従五位上であった。父親との決裂は男自身の安定した生活の喪失にも繋がりかねないため、男は父親の意に沿った行動をとる他に方法がない。もしかしたら小説の男の方も、根はそれなりに善良であって、また彼なりに姫君のことを想い続けていたのかもしれないが、けれども芥川の記述のみでは、読者は男に対してそう共感を抱くことができず、反対に、男の無責任ともとれる行動の犠牲となって命を落とした姫君の結末の悲劇性が原話以上に高められることで、読者の思いは姫君の側に集中するのであった。おそらくはこれこそが、芥川の意図するものだったのである。

原話の場合、男が登場して姫君と婚姻するまでの前半部分を除くと、そのストーリーは男の行動を中心にして展開している。よって一応ながら出家機縁説話のかたちをとる原話は、男の方を物語の主人公に設定しているともみなせるであろう。何故なら姫君の方については、冒頭部分で僅かな説明がなされた以外には、その心理描写はおろか行動についてもほとんど表現が為されていないからである。しかしこれに対して芥川の小説は、男についての記述を減らすと同時に、姫君の内面を説明する描写を大幅に増やしている。そしてこれは作品全体としてみれば、姫君側のストーリーを膨らませる仕様となっている。つまり芥川は、物語の主人公を男の方ではなく姫君に設定することによって、作品のテーマを男の出家譚から姫君の生きた人生の物語へと創り変えているのではないだろうか。

また原話との比較から、小説の中に更なるもう一つの大きな相違をみることができる。それは乳母についての記述である。原話に登場する乳母は、姫君の両親が「乳母ノ心ハ打チ解(とくべ)クモ無シ」や「後(うしろ)メタ無キ者」という評価を下し、喪に服す姫君でさえ「乳母ニモ不被打解(うちとけられ)ズ」となるような人物であった。けれども芥川の小説の乳母にはそのような面影が全くみられず、両親を喪い「たった一人の乳母のほかに、たよるものは何もない」姫君のため、けなげにも「骨身を惜まず働き続け」ている。この乳母は、姫君の幼い頃から臨終に至るまでのおよそ全ての時間で姫君に寄り添っており、まさに自らの人生をかけて姫君に尽くしたといえるであろう。原話では、男が臨終間際の姫君を発見した際、その傍にいた老尼の正体について詳しい記述が為されていない。しかし芥川は、この老尼の正体が姫君の乳母であると明確に定めることで、その献身ぶりを表しているのであった。このような乳母像の違いには芥川の意図が介在していると思われるが、それは一体何なのであろうか。

おそらくは原話の乳母像の方が、頼れる乳母一人さえもいないという姫君の完全な孤独状態を演出するには効果的であろう。悲劇性ひとつをとってみれば、よりふさわしいのは原話であるように思われる。しかし芥川は、あえて乳母の人物像を変えている。これは芥川が、自らの思い描く物語を仕上げるためにも、必然的に乳母の性格改変を迫られたということであろう。すなわち小説の乳母に与えられた役割は、単純に悲劇性を演出するようなものではない、何か別の役割であったと考えられる。それは何か。この議論については、第二章に持ち越すこととしたい。

第三節　他の説話の挿話

「六の宮の姫君」をめぐるこれまでの研究によって、原話の他に、『今昔物語集』巻第十五「造悪業人最後唱念仏往生語第四十七」および巻第二十六「東下者宿人家値産語第十九」、更には『発心集』第四の七「或女房臨終見変魔事」(7)の、合わせて三つの説話が部分的に作品の典拠となっていることがわかっている。第三節においては、挿話の材料となった三つの説話のうち、『今昔物語集』にある二つの説話について、それぞれ考察を進めてみることとしたい。

結婚した姫君と男の暮らしぶりが描かれる小説の第二節中盤には、男が姫君に語って聞かせる「気味の悪い話」が登場する。

> ある時雨の渡った夜、男は姫君と酒を酌みながら、丹波の国にあったと云う、気味の悪い話をした。出雲路へ下る旅人が大江山の麓に宿を借りた。宿の妻はちょうどその夜、無事に女の子を産み落した。すると旅人は生家の中から、何とも知れぬ大男が、急ぎ足に外へ出て来るのを見た。大男はただ「年は八歳、命は自害」と云い捨てたなり、たちまちどこかへ消えてしまった。旅人はそれから九年目に、今度は京へ上る途中、同じ家に宿って見た。所が実際女の子は、八つの年に変死していた。しかも木から落ちた拍子に、鎌を喉へ突き立てていた。――話は大体こう云うのだった。（p 42）

以上の箇所は、原話には全く存在しない話である。この奇妙な話を聞くことによって、姫君は「宿命のせんなさに脅され」る事となるのだが、この話は『今昔物語集』の巻第二十六「東下者宿人家値産語第十九」を典拠とした挿話であった。以下に説話の粗筋を示す(8)。

東国へ行く者が村里の裕福そうな家に泊まった。その夜急に家の奥の方が騒がしくなり、家の女主人から身籠った娘が出産するのだと聞いた。暫くすると声が聞こえてきたので「産ツルナメリ」と思っていると、部屋のわきの戸から「長八尺許ノ者ノ、何トモ無ク怖シ気ナル」者が出てきて、「極テ怖シ気ナル音」で「年ハ八歳、□ハ自害」と言い去った。何者だろうと不審に思うが、誰にも話さずに早朝急いで家を出てしまった。

九年後、泊まった家を再び訪れた者は女主人に生まれた子供のことを尋ねる。すると主人は泣きだし、生まれたのは男の子で、「去年ノ其月ノ其日、高キ木ニ登テ、鎌ヲ以テ木ノ枝ヲ切侍るケル程ニ、木ヨリ落テ、其鎌ノ頭ニ立テ死侍ニキ」と言った。宿を借りた者は、戸口から出て行った者の言葉を「然ハ其ヲ鬼神ナドノ云ケルニコソ有ケレ」と思って主人にそのことを伝え、その後京でも語り伝えた。「人ノ命ハ皆前世ノ業ニ依テ、産ルヽ時ニ定置ツル事ニテ有ケルヲ、人ノ愚ニシテ不知シテ、今始タル事ノ様ニ思歎ク也ケリ。然レバ皆前世ノ報ト可知也、トナン語リ伝ヘタルトヤ」。

この説話に登場する男は、正体不明の怪人が新生児の寿命は八歳と言って去るのを見、九年経ってその予言が的中したことを知ると、それが鬼神の仕業であると思い当る。そして説話の話全体としては、人の命は前世の業因によるもので、生まれたときにはもう既に

定まっているという仏教的宿命観を説いて結びとなっている。

この説話と小説の「気味の悪い話」を比較すると、出産した女性が、説話では宿の主人の娘であるのに対して小説ではその妻となっている点、また生まれた子も、説話では男の子であるのに小説では女の子となっている点など、多少の違いは見受けられる。けれどもその内容全体は、ほとんど似たようなものと捉えることが可能であろう。芥川は、自らが用いようとする説話では何が重要なものとして語られているかを理解した上で挿話を行ったはずである。ここでは、宿命を語る説話を加えることで、姫君の心に「宿命のせんなさ」を印象付けるねらいがあった。出産した女性の立ち位置を妻に、そして宿命を背負って生まれた子供を女の子としたのも、女の身である姫君ただ一人に、「宿命のせんなさ」をより身に沁みて理解させるようなはたらきを、期待したためであろう。故にこの説話は、芥川の思惑に沿って意図的に選び取られた説話であると考えられる。

また、もう一つの部分的な典拠とされる『今昔物語集』の巻第十五「造悪業人最後唱念仏往生語第四十七」の挿話がみられるのは、姫君臨終の場面である。不気味なほど痩せ枯れた姿で破れ莚の上にうつ伏していた姫君は、約束の時になっても現れなかった男の姿を認めると、何か叫んだきりそのまま死にいかんとするのであった。

> 乳母はまるで気の狂ったように、乞食法師のもとへ走り寄った。そうして、臨終の姫君のために、何なりとも経を読んでくれと云った。法師は乳母の望み通り、姫君の枕もとへ座を占めた。が、経文を読誦する代りに、姫君へこう言葉をかけた。
> 「往生は人手に出来るものではござらぬ。ただ御自身怠らずに、阿弥陀仏の御名をお唱えなされ。」
> 姫君は男に抱かれたまま、細ぼそと仏名を唱え出した。と思うと恐しそうに、じっと門の天井を見つめた。
> 「あれ、あそこに火の燃える車が。……」
> 「そのような物にお恐れなさるな。御仏さえ念ずればよろしゅうござる。」
> 法師はやや声を励ました。すると姫君はしばらくの後、また夢うつつのように呟き出した。
> 「金色の蓮華が見えまする。天蓋のように大きい蓮華が。……」
> 法師は何か云おうとした。が、今度はそれよりもさきに、姫君が切れ切れに口を開いた。
> 「蓮華はもう見えませぬ。跡にはただ暗い中に、風ばかり吹いて居りまする。」
> 「一心に仏名を御唱えなされ。なぜ一心にお唱えなさらぬ？」
> 法師はほとんど叱るように云った。が、姫君は絶え入りそうに、同じ事を繰り返すばかりだった。
> 「何も、――何も見えませぬ。暗い中に風ばかり、――暗い風ばかり吹いて参りまする。」

男や乳母は涙を呑みながら、口の内に弥陀を念じ続けた。法師も勿論合掌したまま、姫君の念仏を扶けていた。そう云う声の雨に交る中に、破れ莚を敷いた姫君は、だんだん死に顔に変って行った。……　（p 49-50）

姫君は臨終の際に「火の燃える車」を見、次いでは「金色の蓮華」を目にし、そして最後には「何も見えませぬ」と繰り返して息を引き取った。当然ながらこの話は、原話に全く描かれていないストーリーである。そしてこの時の、臨終の間際に火の車や蓮華の花を見るという部分について典拠となる説話こそ、既に挙げた、残るもう一つの説話なのである。以下にその粗筋をまとめてみる[9]。

日頃悪行を重ねる男がいた。男はある人の「罪ヲ造レル人ハ必ズ地獄ニ堕ル也」という教えを「極タル虚言也」と言うと、ますます殺生・放埒の限りを尽くした。そのうち重い病に罹って死に瀕し、「其ノ時ニ、此ノ人ノ目ニ火ノ車見エケリ」。それ以来は「恐ヂ怖ルヽ事無限クシテ」、一人の「智リ有ル僧」を呼ぶと、「『罪造ル者地獄ニ堕ツ』ト云フ事ハ実ニコソ」と言って長年信じなかったことを後悔してひどく泣くのであった。

すると僧は男に、火の車をみて信じたのだから、「『弥陀ノ念仏ヲ唱フレバ、必ズ極楽ニ往生ス』ト云フ事ヲ信ゼヨ」と諭した。これを聞いた男が手を合わせて「南無阿弥陀仏」と千度唱えると、僧は「火ノ車ハ、尚見ユヤ否ヤ」と尋ねた。男は「火ノ車ハ忽ニ失ヌ。金色シタル大キナル蓮花一葉ナム目ノ前ニ見ユル」と言うとそのまま息絶え、僧は感激の涙を流して帰っていった。「此レヲ思フニ、仏ノ説キ給フ所ニ露モ不違ネバ、只念仏ヲ可唱キ也、トナム語リ伝ヘタルトヤ」。

小説の素材となったこの説話は、破戒不信の悪人が臨終の際に地獄の火車の迎えを得、発露懺悔して弥陀の名号を唱えることによって火車を帰して聖衆の来迎にあずかったという、いわゆる悪人の発心往生譚であった。当然のことながら、この挿話を以て姫君を罪人と捉えるのはふさわしくないであろう。ここで問題となるのは、「火の燃える車」が象徴する地獄に対して姫君が怯えをみせた後に、みごと極楽を象徴する「金色の蓮華」を見ることが出来たにも関わらず、説話の悪人と違って「蓮華はもう見えませぬ」と語ったということである。説話の男は、最終的には極楽往生を遂げることができた。けれども姫君の方は、「暗い中に風ばかり、――暗い風ばかり吹いて参りまする」と繰り返すばかりで息を引き取ってしまうのである。両者のこの違いは一体何なのであろうか。

説話の最後の一文では、仏のお説きなさったところと少しも違っていないからには、ただひたすらに念仏を唱えるべきである、という教えを説いている。これは小説における、臨終の姫君のため「一心に仏名を御唱えなされ」と語りかける乞食法師の姿に重なるものがあるだろう。法師はひたすらに念仏を勧めるが、けれども姫君は自らが目にする光景をただただ呟くばかりで死に至るのであった。つまりこの挿話に期待されたものは、典拠となった説話で語られている念仏往生の教訓が、思いもよらぬ形で裏切られてしまうということなのではないだろうか。仏教の教義に従えば、念仏を一心に唱えたのであればたとえ

悪人であろうとも往生を遂げられるのである。それは姫君の生きた平安朝の時代において、広く世間一般に知られていたことであろう。にもかかわらず姫君は、傍らに念仏を勧める法師という存在がありながらも、往生しなかったのである。このような姫君の結末の意外性と特殊性を高めるため、芥川は悪人往生の説話の一部分を取り入れたのであった。

当然の如く、この場面に登場する偶然にも居合わせた乞食法師という者は、原話に存在しない人物である。説話の悪人が頼った「智リ有ル僧」は、この乞食法師とは様子が異なる為、その原型になったとは考えにくい。よってこの登場人物は、芥川の完全なオリジナルキャラクターであるといえるだろう。加えてこの場面の最後、姫君が風ばかり吹く暗闇の光景を見て往生を遂げることなく息を引き取るという展開についても、典拠となるものは存在せず、芥川の完全な創作部分であるといえる。原典の存在しないオリジナル部分では芥川の思惑が最も顕著に表現されているはずであるから、すなわち説話の部分的な挿話は、まさに芥川の本命ともいうべきオリジナルの結末部分に大きな意味合いを持たせるために、その前段階として求められたと考えられる。

第四節　芥川のオリジナル

先に少し触れたが、小説中の典拠が存在しない箇所こそ芥川のオリジナル部分であるといえる。「六の宮の姫君」の中で芥川の完全な創作部分といえるのは、前節で挙げた、姫君が臨終の際に「暗い中に、風ばかり吹いて居りまする」と言って息絶える描写の他に、男が京を去った後に男を待ち続ける姫君側のストーリーと、姫君臨終の後日譚となる小説の第六節の、合わせて二つの場面がある。

先ずは小説第三節の、別離の間の姫君側のストーリーについて、一部引用をあげてみることにする。約束の六年目の春がめぐっても男は戻らず、姫君の暮らしは困難を極めていた。そんな折、乳母は姫君に新たな男との婚姻を提案したのである。

> 姫君はその話を聞きながら、六年以前の事を思い出した。六年以前には、いくら泣いても、泣き足りないほど悲しかった。が、今は体も心も余りにそれは疲れていた。「ただ静かに老い朽ちたい。」……そのほかは何も考えなかった。姫君は話を聞き終ると、白い月を眺めたなり、懶げにやつれた顔を振った。
> 「わたしはもう何も入らぬ。生きようとも死のうとも一つ事じゃ。……」（ｐ45）

既に述べたように原話では男が物語の主人公として設定されているため、姫君と男が別れた後の物語には男側のストーリーのみが描かれており、姫君側については全く語られていなかった。しかし芥川の小説では姫君が主人公として設定されていることから、男が去った後の姫君側のストーリーが新たに追加され、反対に男側のストーリーはごく僅かなものとなっている。男が京を離れた後、生活の支えを失った姫君は、男と再会するまでの間一体どのような暮らしをして生き、またどのような思いで日々を過ごしてきたのだろうか。

原話を読んでいるうちに自然とわくそのような問いに対し、芥川はひとつの答えを与えようと試みるのであった。それこそが、約束の時期になっても帰らぬ男を待つ姫君が、乳母に勧められた再婚の話を断るという場面なのである。では姫君はどうして、「ただ静かに老い朽ちたい」と考え、「わたしはもう何も入らぬ。生きようとも死のうとも一つ事じゃ。……」という言葉を発するまでに至ったのだろうか。このような疑問を読者に抱かせ、続く姫君の最期の場面におけるオリジナル描写を以て、芥川は、自らが思い描く作品の完成を狙ったのではないだろうか。新しく書き込まれた姫君の描写からは、芥川のイメージする姫君像をみることが可能であるだろう。これについては、第二章で詳しく扱う事とする。

最後に小説の構造を検討する上で特に注目しておきたいのが、姫君臨終の後日譚となる小説の第六節である。これは物語の最後を飾る節であるが、原話には当然の如く存在せず、またこれと類似した内容の説話も一切存在していない。つまり第六節は、節のまるごと一つ分が芥川のオリジナルで構成されているのである。芥川の意図した物語の締めくくりとしては妥当なものとも言えるかもしれない。姫君の死から数日後の月夜のことである。朱雀門の前の曲殿で膝を抱えていた乞食法師の前に、陽気に足を運ぶひとりの侍が現れた。

> 侍は法師の姿を見ると、草履の足を止めたなり、さりげないように声をかけた。
> 「この頃この朱雀門のほとりに、女の泣き声がするそうではないか？」
> 法師は石畳みに蹲ったまま、たった一言返事をした。
> 「お聞きなされ。」
> 侍はちょっと耳を澄ませた。が、かすかな虫の音のほかは、何一つ聞えるものもなかった。あたりにはただ松の匂が、夜気に漂っているだけだった。侍は口を動かそうとした。しかしまだ何も云わない内に、どこからか女の声が、細そぼそと歎きを送って来た。
> 侍は太刀に手をかけた。が、声は曲殿の空に、一しきり長い尾を引いた後、だんだんまたどこかへ消えて行った。
> 「御仏を念じておやりなされ。――」
> 法師は月光に顔を擡げた。
> 「あれは極楽も地獄も知らぬ、腑甲斐ない女の魂でござる。御仏を念じておやりなされ。」
> しかし侍は返事もせずに、法師の顔を覗きこんだ。と思うと驚いたように、その前へいきなり両手をついた。
> 「内記の上人ではございませんか？どうしてまたこのような所に――」
> 在俗の名は慶滋の保胤、世に内記の上人と云うのは、空也上人の弟子の中にも、やん事ない高徳の沙門だった。　（p 51-52）

物語のこのような締めくくり方に対して、先行研究においては「木に竹をついだ感じ」[10]

などの評価もなされているが、芥川自身が意図してこのような結びを用意した以上、批評ばかりに力を注ぐのは妥当でないだろう。むしろ、芥川が何故このような会話で以って小説の結末としたのか、その思惑について探っていくべきである。

この第六節で初登場する侍は、乞食法師と同様に、原典の存在しない芥川のオリジナルキャラクターである。あまりにも唐突すぎる登場のために、作中における立ち位置が曖昧であるようにも思われるが、しかしこの二人の掛け合いによって、読者は姫君の魂が往生を遂げることなく現世に残り続け、未だ苦しみ続けているということに気付かされるのである。そのとき読み手が受ける衝撃は非常に大きなものとなるだろう。なぜならここにおいてはじめて、姫君の死はそれで完結をみせず、その魂は地獄にも極楽にも落ち着くことなく死後もさ迷い続けるという、全くもって救いのない結末が用意されていたことが明らかとなるからである。

原話と芥川の作品どちらにおいても、姫君が生活に困窮して悲劇的な死を迎えるという展開に変わりはない。しかし芥川の小説の場合、成仏しきらない姫君の魂という描写には、地獄や極楽といった観念的なものでは片付かない苦しみが表現され、作品の姫君が原話以上に追い詰められる様が描き出されているのである。おそらくはこの苦しみの背景にあるのが、姫君の心にあらわれたという、風ばかり吹く暗闇の風景なのではないだろうか。予想をはるかに上回る残酷な展開が用意されていたことに気付いた読み手は、物語の結末部分に至ってはじめて、姫君がその最期に述べた「暗い中に、風ばかり吹いて居りまする」という言葉の意味について深く考えさせられることとなる。姫君が救済されないのは一体どういうことなのか。この結末と姫君が最期に目にした風景とのあいだには、何か関わりや意味合いがあるのだろうか。そのような問いかけこそ、芥川がこの小説を執筆する上で狙った効果であり、かつまた最も書き表したかった部分であるように思われる。

典拠となった説話との比較検討によってまず明らかとなったのは、物語の主人公を男側から姫君側へと変えることで、男の出家譚とは異なった、新たな姫君のストーリーを創り出そうとする芥川の意図であった。芥川は自らの解釈に基づく文章の削除と付加と改変を小説の随所で行っており、これによって登場人物の役割は変更され、特に姫君については、その人物造形が深められつつも独自のものへと創り変えられていることに気付く。

また物語の内容面から作品を検討してみると、「気味の悪い話」の挿話によって小説には新たな「宿命のせんなさ」というキーワードが付け加えられ、挿話とオリジナル展開の組み合わせによって描かれた姫君の臨終場面においては、地獄と極楽のどちらの光景も見えなかった姫君の、法師の勧める念仏による往生を遂げられずに暗闇の中に風が吹いていると呟いたまま息絶える姿があらわされている。更には原話に存在しない乞食法師や侍の登場と会話によって、姫君にとっては決して救済のない結末が用意されていることが明らかとなったのである。

これを通してみると、芥川は姫君の味わった苦しみと、またその苦しみを抱える姫君の生き方の、主に二つを軸として物語を創り出しているように考えられる。つまり芥川のね

らいは、最後には魂のみの姿となってしまう姫君の嘆きの根幹となっているもの、すなわち苦しみを、物語全体を通して表現することにあったのではないのだろうか。それでは、この苦しみとは一体何なのであろう。それについては、小説中に芥川独自の姫君の内面描写が数多く取り入れられていることから、姫君の生き方と何か深い関連性をもつ苦しみであると、暗に示されているように思われる。よって第二章においては、芥川の思惑を視野に入れながらも、作中の姫君が何を感じ、考え、そしてどのように行動してきたのか、その人生を具体的に辿ってみることで、姫君が抱いた苦しみの意味について読み解いていくこととしたい〈11〉。

第二章　六の宮の姫君について

六の宮の姫君は原話と同様に、両親の死をきっかけとして生活苦に陥ったのち、男との婚姻と別離を経て、終には再会した男に抱かれながらその生涯を終えてしまう。しかし芥川の小説はそれにとどまらず、姫君は往生を遂げられないまま、その魂は苦しみつつも現世に留まり続けるのであった。この一連のストーリーでは、姫君への救済はおろか、姫君の苦しみも解決へと導かれておらず、そもそも芥川にはそのような意図がないようにも思われる。小説の姫君はどうしてこのような結末を迎えねばならなかったのだろうか。第二章では、芥川によって新たに書き加えられた姫君の心情に差し迫る描写を中心に本文を具体的に検討することで、芥川の創り出そうとした「六の宮の姫君」像に迫りつつ、何故芥川が姫君にこれほどまでの苦しみを与えたのかについて、考察を試みることとしたい。

第一節　男と出会うまでの姫君

「六の宮の姫君の父は、古い宮腹の生れだった」。この一文からはじまる小説の冒頭部分では、先ず六の宮の姫君とその両親についての説明が述べられている。高貴な血筋である姫君の父親は、時勢に遅れがちな昔気質の人であったために官も正五位下の兵部大輔より昇らず、所謂出世コースからは外れてしまった人物であった。その娘として産まれた姫君は、幼い頃より長い期間を両親と共に過ごしている。父母が健在であったときの姫君について以下のような記述がみられる。

> 父母は姫君を寵愛した。しかしやはり昔風に、進んでは誰にもめあわせなかった。誰か云い寄る人があればと、心待ちに待つばかりだった。姫君も父母の教え通り、つつましい朝夕を送っていた。それは悲しみも知らないと同時に、喜びも知らない生涯だった。が、世間見ずの姫君は、格別不満も感じなかった。「父母さえ達者でいてくれれば好い。」――姫君はそう思っていた。（p 40）

この記述から、姫君の父親には出世の手段として娘を利用する意図のないことが窺える。また「誰か云い寄る人があれば」と待ち望む様子から、理想的な良い縁談に対しては決して消極的でないことも読み取れるだろう。そもそも小説の舞台となる平安朝当時、女性にはどのような生き方が可能性としてあり得たのだろうか。たとえば『更級日記』(12) においては、娘をより高貴な家の者に嫁がせて良い暮らしをさせ、自らが亡き後も路頭に迷うことのないようにしてやりたいと願う父親の描写がみられる。当時の中流下層貴族の娘たちは、後ろ盾となる存在なしには安定した生活を送れないというのが実情であったのだ。当然の如く、姫君の父母は、『更級日記』の父親ほど娘の結婚に意欲的ではない。けれども現状に満足すると同時に、やはり娘には、位の高い男の妻となってこの先も良い暮らしをして欲しいと親なりの純粋な願いを抱いていたと考えられる。

対する姫君の方はどうであろうか。両親の寵愛の中で暮らし、此れと言った生き辛さを感じることも無かったためか、姫君は自らの生涯に「格別不満も感じな」い日々を過ごしていた。「父母さえ達者でいてくれれば好い」という思いには、現状維持の願いが込められている。僅かなりとも娘の将来について考えを持つ両親と違って、姫君はより社会的に華やかな暮らしをしてみたいという願望も、また特別に将来どうなりたいといった望みも持ち合わせていなかった。要するに、先の自分に思いを馳せて未来への希望や不安何ら抱くことなく、只ひたすらに現状に安らぎを得ていたのである。ここで注目しておきたいのは、両親と一緒に暮らす姫君について「悲しみも知らないと同時に、喜びも知らない生涯だった」とする記述である。悲しみや喜びといった感情が「ない」のではなく「知らない」と表記されることによって、小説の読者は、幼い姫君が「つつましい」毎日を生きてきた為に人並み以上の特別強い悲しみや喜びを覚えることがなかったのだろうという推測をする。ここにおいて芥川は、姫君を自らの人生のあり方に対して無頓着に生きる少女として描き出してみせているのであった。

姫君が大人っぽい美しさを具えだした頃、物語は大きな変化をみせる。姫君の「頼みに思った父」が「年頃酒を過ごしたために、突然故人になってしま」い、母親の方も「返らない歎きを重ねた揚句」、とうとう夫の後を追うようにして半年の内に亡くなってしまう。姫君の現状維持の願いは、父母の死によって覆されることとなってしまった。そしてこのような事態に直面した姫君はというと、「悲しいと云うよりも、途方に暮れずにはいられなかった」。今まで自分を大切に育ててくれた両親が相次いで死んだというのに、姫君はこうした反応しかすることが出来ない。これは、父親の死後「返らない歎きを重ねた揚句」死に至った母親と比べると、全く以て異質な反応と言えるだろう。姫君にとって両親は、母親が夫である父親を想うほど、唯一無二の執着すべき対象と捉えられていなかったことがここで明らかとなる。つまり姫君は、人に対しての強い執着をもっていなかったのである。

今までは世間との関わりを求める必要のなかった姫君だが、これからは生きるため否応なしにも厳しい現実と向き合っていかなければならない。両親を喪って困惑を露わにするのは、「たった一人の乳母のほかに、たよるものは何もない」状態に陥った姫君が、それほど唐突に突きつけられた現実の厳しさに呆然とした、ということなのであろう。けれども乳母の健気な働きによって、姫君におとずれるであろう現実の急激な変化はくい止められていた。がしかし、乳母の努力も空しく屋敷からはしだいに贅沢品が消えていき、召使も誰からか暇をとり始めていく。そのような状況下においては、「世間見ず」と称された姫君もまた、周囲の様子を見ることで自らの置かれている立場を理解していくのであった。

> 姫君にも暮らしの辛い事は、だんだんはっきりわかるようになった。しかしそれをどうする事も、姫君の力には及ばなかった。姫君は寂しい屋形の対に、やはり昔と少しも変らず、琴を引いたり歌を詠んだり、単調な遊びを繰返していた。（ｐ40）

文章の問題のみで考えるならば、この時点の姫君はもしや、「単調な遊びを繰返」すことで現実から目を背けようとし、全てを乳母任せにして逃避に走ったのではという疑惑が浮上する。もし逃避でないとするならば惰性であろうか、いやしかし惰性でもないとするならば他に何か意味のある行為なのであろうかと、与えられた情報の曖昧さ故に、読者はこの行動における姫君の思いを上手く推し量ることができず混乱してしまうだろう。そして芥川が乳母の性格を原話のものと正反対に創り変えたのは、この為なのではなかろうか。「姫君のために、骨身を惜まず働き続け」る乳母は、姫君が「昔と少しも変らず」に遊ぶことを可能にさせていた。原話の信頼できそうにない乳母ではこれが出来ない。また、姫君と乳母の間に対抗関係が生じてしまっては、反発というかたちで姫君の意思度が高められることとなってしまう。この場面における姫君の心中を朧なものとするために、芥川は乳母の人物像を変えるに至ったのかもしれない。

それでは、この場面における姫君の気持ちを朧なものとした意味は何なのであろう。また実際の所、姫君の心境はどのようなものであったのだろうか。情報が曖昧であるのを承知の上で、とりあえず一度、その心情について読み解くことを試みようと思う。姫君は両親の死によって生活の支えが失われたこと、そして現在進行形で生活が辛くなっていくことを確かに理解していた。実際に変化を目にしているのであるから、気付かないわけにはいかないであろう。それでも、自らは以前と変わらぬ生活を続けているのである。姫君は今の状態について、「しかしそれをどうする事も」、自分の「力には及ばな」いと考えていた。これがどの程度の認識であるのか定かでないが、少なくとも姫君は、自らの力に及ばないことであると判断すると、生活の悪化に対しての足掻きを何らすることなく、言うなれば、悪化するにまかせて生活しているということになる。

それはつまりどういうことなのか。悪化するに任せるということは、姫君には現状を改善したいという願い、突き詰めると、今よりも良い暮らしをしたいという願望がないということになる。普通であれば、このまま暮らしが傾けば傾くほど生きることも困難になってしまうということを人は理解しているため、いっそ死に物狂いで現状の回復に努めるであろう。おそらく乳母は、そのような行動をとる人物である。けれども姫君は、生き永らえる努力をしないものの、一方で「単調な遊び」には勤しむのであった。これはある意味異様な光景とも言えるだろう。姫君自身の問題として、一体自らの行為についてどれほどの自覚と判断が伴っているのかは今のところ疑問であるが、この時の姫君は内心で、究極の意味においてはこのまま生活が維持できなくなって空しく死ぬ事になろうとも構わないとまで考えていたのであろうか。しかし何も明確な判断を為せていない可能性も十分に高く、実際のところは謎である。もしかすると情報が曖昧なのは、姫君自身の考えが曖昧であるためだからであるとも推測される。

姫君たちの生活がより一層苦しくなっていくある秋の夕暮れ時、乳母は考え考え次のようなことを言い出した。実は人づてに「丹波の前司なにがしの殿」が姫君に会わせて頂きたいと申し出ており、今のように心細い暮らしをするよりも「少しは益しか」と思うから、

その男に会ってみてはどうでしょう、というものである。要は男の求婚を受け入れて、その男の力を頼りに今の苦しい生活から抜け出しましょうという提案であった。これはおそらく乳母なりに精一杯考えて導き出した結論であり、外見も中身も良いという噂で尚且つ位も高い男との縁談話を持ってくるあたり、姫君への十分な配慮が見受けられる。そのような好条件の婚姻を勧める乳母の言葉に対して、姫君が示した反応は次の通りであった。

> 姫君は忍び音に泣き初めた。その男に肌身を任せるのは、不如意な暮しを扶けるために、体を売るのも同様だった。勿論それも世の中には多いと云う事は承知していた。が、現在そうなって見ると、悲しさはまた格別だった。姫君は乳母と向き合ったまま、葛の葉を吹き返す風の中に、いつまでも袖を顔にしていた。……（ｐ41）

今の暮らしの辛い事を承知していた姫君は、生活のためにも前司の妻とならねばならないことを理解していた。乳母の提案は当時の常識に照らしてみても最もなことであり、平安朝の女性が生きるためには、生活の支えとなる男性の存在が不可欠であったと思われる。「不如意な暮し」という説明が与えられている以上、姫君が今の生活に満足を見いだせていないのは明白であり、当然の如く男の妻となるということは、今の暮らしから抜け出せるということに他ならない。けれどもそれは姫君にとってみれば意志に反する婚姻であり、涙を流さずにはいられなかったのである。ここにおいてはじめて、今までは朧であった姫君の意志が、行為というかたちで明らかとなるのであった。

乳母からの婚姻の勧めを聞いた姫君は、現に泣いている。つまりは見知らぬ男の妻となることは、姫君にとって本来望まぬことであった。暮らしが辛くなっていく際にも、なるがままの心持で日々を過ごしていたように見受けられた姫君であるが、ここにおいて、男と婚姻することだけは容認し難いことであったのである。しかし、ここで婚姻の申し出を断ることは、今後の生活の更なる困窮を意味しているのである。それでも耐え難く思われるのは、どうしてなのだろうか。

確かにこの婚姻は、裕福な家の姫が今以上により良い暮らしを得るため、高貴な男の妻となるような婚姻とは経緯が異なっており、決して前向きな婚姻とは言えないであろう。けれども自らの生活が、ひいては今後の自らの生命が関わっている状況において、生活苦からの解放を喜ぶそぶりが全く見受けられない姫君の描写からはどうも不思議な印象を受けてしまう。姫君にとっては、男の妻となるよりもむしろ、このまま没落して滅んだ方が望ましいという事であったのだろうか。真相は定かでないが、ここまでくると姫君には、何かしら望む生き方というものが明確でないにせよ、望まぬ生き方というものについては、しっかりと自らの考えを持ち合わせていた、ということになる。そして婚姻は正に望まぬことの方に属しており、けれども状況が許さないため、姫君は望むと望まざるとに関わらず歩まねばならない生き方に対し、屈服と無念の涙を流したのではないだろうか。

第二節　男との婚姻と別れ

当初は不本意な婚姻に涙を流す姫君であったが、しかし続く小説の第二節においては、その様子にも変化が顕われ始めている。姫君は「いつのまにか、夜毎に男と会うように」なっていた。相手の男は噂通り優しい心の持ち主であって顔かたちも良く、そして姫君の美しさに何もかも忘れるほど魅了されているのだった。しかし姫君の方はというと、男の側とは少し事情が異なっているようである。

> 姫君も勿論この男に、悪い心は持たなかった。時には頼もしいと思う事もあった。が、蝶鳥の几帳を立てた陰に、燈台の光を眩しがりながら、男と二人むつびあう時にも、嬉しいとは一夜も思わなかった。
> その内に屋形は少しずつ、花やかな空気を加え初めた。黒棚や簾も新たになり、召使いの数も殖えたのだった。乳母は勿論以前よりも、活き活きと暮しを取り賄った。しかし姫君はそう云う変化も、寂しそうに見ているばかりだった。（ｐ42）

上記に描かれた姫君は、決して男の優しさを否定していない。それでも「時には頼もしいと思う事もあった」にも関わらず、男との逢瀬について「嬉しいとは一夜も思わなかった」のである。おそらく男の方は、姫君の美しさに夢中で幸せの絶頂にあった。また、姫君が男の妻となったことで暮らしは安定をみせたので、乳母もこの状況を快く歓迎している。しかしそれでも姫君はただひとり、寂しげな様子を見せているのである。男との婚姻を意思に反するまま承諾した姫君であるから、やはり心の内では未だ納得しきらない思いが渦巻いているといったところであろうか。

もちろん姫君は、両親の死後しだいに生活が悪化していった時と同様に、男と婚姻を結んだ以降、その生活が徐々に改善していく様子をもしっかり感じ取れていたはずである。よって、今の男との結婚生活をただただ悲観する気持ちばかりがあるという訳ではないのであろう。現在の男と一緒の生活そのものに悪いことは感じていない。しかしそれでも以前までの暮らしを思い切ることが出来ず、〈変化〉に対する寂しさを拭い去れないでいるのである。少なくとも両親への執着はそう強く抱いていない姫君であるから、以前の幼い頃の暮らしぶりに対して何かしらの未練があるようには思われない。姫君にとって最も心苦しいのは、詰まる所、自分の身の回りを取り巻く状況に合わせて自分の生き方を〈変化〉させねばならないこと、そのものなのであろう。姫君が〈変化〉そのものに蟠りを覚える人物であると捉えるならば、幼い頃の現状維持の願いも、また唐突な両親の相次ぐ死という状況を前にして困惑したことにも、納得の行く答えが得られるような気がするのである。

姫君の結婚生活は当初、夫婦の営みがあれど男女間の愛情の方が欠落した状態にあった。ここにおいて登場するのが、男が姫君に語って聞かせる気味の悪い話である。第一章において既に取り上げた通り、物語の途中で唐突に挟み込まれたこの気味の悪い話は、他の説話を典拠とした、芥川による挿話であった。ある時雨の渡った夜に男は姫君と酒を酌みな

がら、大男の予言通りに八歳で変死する女の子の話を語って聞かせたのである。

> 姫君はそれを聞いた時に、宿命のせんなさに脅された。その女の子に比べれば、この男を頼みに暮しているのは、まだしも仕合せに違いなかった。「なりゆきに任せるほかはない。」――姫君はそう思いながら、顔だけはあでやかにほほ笑んでいた。
> 屋形の軒に当った松は、何度も雪に枝を折られた。姫君は昼は昔のように、琴を引いたり双六を打ったりした。夜は男と一つ褥に、水鳥の池に下りる音を聞いた。それは悲しみも少いと同時に、喜びも少い朝夕だった。が、姫君は相不変、この懶い安らかさの中に、はかない満足を見出していた。（p 42）

気味の悪い話を聞いた姫君は、「宿命」について否応なしに強く意識させられることとなる。正にそれこそが、この挿話における芥川のねらいであった。「宿命のせんなさ」に脅かされた姫君は、話に登場する女の子の人生と自らの人生とを比較しはじめ、結果的には「この男を頼みに暮しているのは、まだしも仕合せに違いな」いという考えに至る。そしてこれをきっかけにして姫君の内面では変化が生じ、男との結婚生活に「懶い安らかさ」を感じて「はかない満足」を見出すようになるのであった。つまりこの瞬間、姫君は自らの暮らしを「まだしも仕合せ」と考えることによって、生まれて初めての人生の捉え直しを行ったと言える。今の姫君の安定した生活は男によって守られており、男を頼みに暮らしている限りは、その人生に劇的な変化が訪れる可能性も、今の自分からかけ離れた生活を強いられる可能性も少ない。だからこそ「なりゆきに任せる他はない」のだ、というように姫君は考えたのではないのだろうか。

この「なりゆきに任せる他はない」という姫君の思いは、字面のみでみると思考の放棄と捉えられかねない。けれども実際は、「宿命」という概念を新たに取り入れることによって、男と婚姻せざるを得なかった状況の下、詮無き自らの人生というかたちでひとつの了解をしてみせ、これこそ正しく自分自身の人生であるのだ、という意識を確かに創っていこうとする姿勢であると読み取ることもできよう。幼い頃の姫君は、自らの人生のあり方に対して無頓着に生き続け、両親の死による生活苦という状況変化に陥ると、屈服というかたちでの婚姻の承諾を行い、嘆きや寂しさを身に沁みて感じるのであった。しかしここに至っては、結婚生活を確かに自分自身の人生として受け止めるだけの心境に達している。この受け止めが可能となったからこそ、姫君は今の結婚生活に対してもようやく心からの納得が出来るようになり、次の段階へと進んで男との結婚生活の中に安らぎや満足を見出すようになったと推測されるのである。

なお、姫君について「悲しみも少いと同時に、喜びも少い朝夕だった」とする描写から、父母の寵愛を受けていた頃の「知らない」となっていた語りが「少ない」へと変化していることに気付く。これは僅かな変化であるかもしれないが、芥川による意図的な書き替えが行われている以上重要な意味を持っていると言えよう。ここでは、新しい状況と対峙す

る中で、姫君の人間個人として自立した意識のようなものが、以前よりも飛躍的に高まってきたことが示唆されているように思われる。

文中の「懶い安らかさ」や「はかない満足」といった、どこか刹那的な印象を与える言葉が暗示する通り、姫君の安穏な日々はそう長く続かない。やっと春の返ったある夜、男は突然、父の任官に伴って京を離れなければならなくなったことを告げて、五年後の再会を約束するのであった。

> 「しかし五年たてば任終じゃ。その時を楽しみに待ってたもれ。」
> 姫君はもう泣き伏していた。たとい恋しいとは思わぬまでも、頼みにした男と別れるのは、言葉には尽くせない悲しさだった。男は姫君の背を撫でては、いろいろ慰めたり励ましたりした。が、これも二言目には、涙に声を曇らせるのだった。（ｐ43～44）

男との婚姻を勧められたときの姫君は、「忍び音に泣き初め」て「いつまでも袖を顔にしていた」。けれども男から離京を告げられた今回の場合においては、忍ぶことすらせずに「泣き伏し」て、「言葉には尽くせない悲しさ」を身体全体で反応してみせている。自らを「仕合せ」であると認識して、ようやく結婚生活にも安らぎを見出せたというのに、この期に及んで「思いの外急」な別れが訪れてしまったのである。このとき姫君が感じた悲しみは人並み以上のものであり、男との婚姻を承諾せねばならなかった嘆きの域をはるかに超えるものであった。更に芥川は、「たとい恋しいとは思わぬまでも」の文句をわざわざ与えることによって、姫君の歎きが男女の情では説明できないものであると強調してみせている。姫君からみて、男の存在は一体どのように位置づけられていたというのであろうか。

男と出会う以前の姫君は「世間見ず」に生きており、両親や乳母といった近しい者ばかりに囲まれて生活していた。そのような生活が一変してしまった頃の姫君が新たに出会った存在こそ、婚姻を申し込んできた男なのである。つまり姫君にとって男は、世間という外の世界に直面した際初めて接触した他者であったということが可能であろう。それに加えて男は、契機は姫君自身による人生の捉え直しであったものの、一度は失ってしまった安らかさと満足感を姫君に取り戻させる「頼もしい」存在となり得たのである。けれども同時に、唐突な別れを告げるという行為によって、姫君に新たな嘆きを与える存在となってしまったと考えられるのである。

たとえ外見の美しさに魅了されていようとも、男が愛情の気持ちを込めて姫君のことを大切に思っていることは確かである。しかしそれでも、励ましの言葉から窺えるように、姫君を慰めながら涙に声を詰まらせる男の嘆きは、六年後に再び会うまでの暫しの間の別離の悲しみであった。対する姫君の側の嘆きは、自らが心の内で「まだしも仕合せ」と考えていた生活の安らかさが、男の宣告によって敢え無く崩れ去ってしまったという衝撃によってもたらされているのである。この瞬間において、皮肉にも、男が姫君の悲しみを正確に推し量れていないということが如実に表現されているのであった。

第三節　男を待つ姫君

男が京を去った後の姫君の暮らしは一体どうなったのであろうか。原話における読者のそのような疑問を解決するかの如く、小説の第三節においては、典拠の全く存在しない芥川によるオリジナルの物語が描かれている。それこそが、約束の時期になっても帰らぬ男を待つ姫君側のストーリーであり、六年目の春がめぐっても男は帰らず、待ち続ける姫君の生活は困難を極めていた。乳母以外の召使は一人残らず立ち退いていき、大風に倒れてしまった姫君の住まいは僅かに雨露を凌げる程度のものとなってしまう。衣服も現在身に付けているものの他には残っておらず、立ち腐れた寝殿から板を剥いで焚物にする毎日であった。そのような生活を送るなか、「しかし姫君は昔の通り、琴や歌に気を晴らしながら、じっと男を待ち続けていた」のである。

ここで疑問に思われるのは、生活に困窮した状態となっても未だ姫君の変わることのない生活態度の描写がみられるのはどうしてなのか、ということであろう。「棚の廚子はとうの昔、米や青菜に変っていた」。それでもなお姫君は、琴を売り払うことなく手元に置いて「昔の通り」に過ごしていたのである。姫君は、両親を相次いで喪った際には、乳母が健気にも働き続ける傍らで「やはり昔と少しも変らず、琴を引いたり歌を詠んだり、単調な遊びを繰返し」ており、更には男との結婚生活の最中においても「昼は昔のように、琴を引いたり双六を打ったりし」ていた。以上の三箇所全ての説明において強調されているのは、姫君の行う琴や歌の遊びが、両親が存命であった「昔」の頃より変わることなく継続して行われているということである。繰り返しの描写をすることに意味合いがあるのだから、成程これらの行為を個々にみてその時々の姫君の思いを推し量ろうと試みても、曖昧な情報量の故に上手くいかないわけであろう。

それでは、このように描かれた姫君の行動の意味は一体何であろうか。確かに表面上は「昔と少しも変わらず」なのかもしれないが、これらの行為に含まれる意味は、姫君の両親が存命の頃と比較すると大きく異なっていると考えられる。幼い頃は、本当に心からの気ままな遊びが可能であったことだろう。そこに突然訪れる最初の変化であるが、姫君は両親という支えを失った生活が逼迫していく状況を理解するなか、それが自らの力には及ばないことであるとの判断を下した後に、自らの取るべき行動として一見すると以前と変わらぬ行為を続けてみせているのである。これは単なる逃避や惰性、もしくは手持ち無沙汰を紛らわす為の気晴らしとも捉えられかねないが、目的はどうであれ当時の姫君の心の支えとなっていたことだけは確かなものとして把握できよう。それに引き続いて、男との結婚生活を受け入れて「満足を見出し」た、いわば生活面での苦労が途絶えた際にも姫君が変わらず遊びを続ける描写。其の後には、再び経済的に厳しい状況に陥りながらも琴を手放さずに、変わらぬ行為を続けようとする姿までもが描かれている。これによって読者は、姫君の頑なな意思のようなものを否が応でも感じ取ることとなってしまうのである。

もはやこれ程までとなると、姫君にとって、琴や歌などの遊びをすることは単なる苦しい状況下での心の支え以上の意味合いがあったように思われる。今までの様子から察せら

れた通り、姫君は人間に執着せずとも〈変化〉そのものに対しては心苦しさを覚えるような人物であった。姫君が過去を懐古して昔は良かった等と思う描写が全く見受けられないことから、既に失われてしまった「格別不満も感じなかった」頃の暮らしぶりを追慕しているとは考え難い。むしろ、自らの過去に対して何かしら未練があるのではなく、これまた姫君の〈変化〉を望まない性質そのものを浮き彫りとする行為として、これらの遊びの継続が表現されたように思われる。つまり姫君は、身を取り巻く環境と生活が激変していく中にあって、〈変化〉を拒むひとつの行為として琴や歌を求めたと考えられるのである。姫君は、〈変化〉によってもたらされた耐え難い苦痛の癒しとして「昔」と変わらぬ行為を求めずにはいられなかった。この描写によって芥川は、姫君が〈変化〉しないこと、すなわち心が安らかで平穏であることに強い拘りのある人物だということを、暗に示そうとしたのではないだろうか。

姫君の行為について言及するならば、琴や歌に遊ぶこと同様に、男を待つという行為もまた、その質は以前と比べると大分変化していることであろう。男が帰京を約束した六年目の春までは、確かに姫君も不安を抱えながらであろうと男の帰りを信じて待っていたに違いない。けれども約束の時を過ぎた今となっては、果たして本当に戻ってくるのだろうかという疑問が生じ、この時点において姫君が男の帰りを本心から待ち続けることは困難になってしまう。生活も次第に辛くなり、もはやその日その日を満足に暮らすこともままならない。それでも姫君は「昔の通り、琴や歌に気を晴らしながら、じっと男を待ち続けていた」。この頑なな姿勢からは、姫君の何かしらの意志のようなものが感じられる。これは、待つことを断念したくない思いとも捉えられるが、もはやこれは男を待っているというわけでもないのかもしれない。もしそうであるならば、姫君が待っているものは一体何なのか。その疑問について考えるためにも、取り敢えずは話を進めてみることにしたい。

その年の秋の月夜のことである。乳母は男がもう戻って来ることはないだろうと考えて、姫君に他の男との再婚を勧めるのであった。どうも、この頃ある典薬之助が姫君に「お会わせ申せと、責め立てて」いるらしい。前の男のことは忘れて他の男の妻とり、今の窮地から脱しようという提案であるが、これは発想としては非常に現実的である。けれども姫君は、そのような乳母の申し出を拒絶するのであった。

> 姫君はその話を聞きながら、六年以前の事を思い出した。六年以前には、いくら泣いても、泣き足りないほど悲しかった。が、今は体も心も余りにそれは疲れていた。「ただ静かに老い朽ちたい。」……そのほかは何も考えなかった。姫君は話を聞き終ると、白い月を眺めたなり、懶げにやつれた顔を振った。
> 「わたしはもう何も入らぬ。生きようとも死のうとも一つ事じゃ。……」（p 45）

平安当時、女性の再婚はごく一般的に行われており別段恥じることでもなかった。そのような、女性が生きていくための手段としては至って普通と捉えられる乳母の提案を、姫君

は断ったのである。小説中で何度か強調して描かれていたことであるが、以前の結婚生活において、姫君が男を「頼もしい」と思うことはあっても「恋しい」と思うことは終ぞあり得なかった。両親の場合と同様に、姫君は男に対しての恋心はおろか、そう強い執着も抱いてはいなかったと推測されるのである。したがって、姫君がただ一人のあるべき夫として男の存在を認めていたとは到底考えられない。にもかかわらず、姫君は他の男との再婚を拒絶したのである。そしてその言い分は、男の帰りを待つことに賭けてみるという前向きな決断でもなく、「ただ静かに老い朽ちたい」とする姫君の願望からくるものであった。つまり、この時点において姫君が待っているものは男の帰りでも、はたまた気持ちの踏ん切りをつける契機といったもの等でもなく、「ただ静かに老い朽ち」ていくことのみだったのである。現段階においても生活が困難を極めている以上、このまま再婚をしないことは、必然的に姫君の言葉通りに死を意味することとなる。ここにおける姫君の望みの真意は、一体どこに在るのであろうか。

文中にみられる「わたしはもう何も入らぬ。生きようとも死のうとも一つ事じゃ。……」という姫君の言葉は、字面のみでみるとどこか投げやりで諦めている印象さえ受けてしまう。しかしこのとき姫君は、乳母の勧めを断るという意思表示によって再婚しない決断を自ら下したといえるであろう。当然ながら姫君は、頼みとなる者が居ない以上、今のままでいることは即ち自らの身の破滅であるということを強く認識していた。それでもなお再婚を断るのは、別の男を頼ってまで自分は生きていこうとは思わないという、むしろ姫君のこれ以上の妥協を拒否する姿勢であるとも読み取れるのではないのだろうか。無気力のようでいて、実際のところは現状を保ち続けることで意識的に滅びに向かおうとしているのである。この時の姫君には、たとえ再婚拒否を選択することによってこのまま死を迎えようとも構わないと思えるほどに、譲れない何かがあるように思われる。

「わたしはもう何も入らぬ」という言葉があるが、そもそもこれまでにおいて姫君自身が自ら何か新しいものを求めたことは一度もなかった。姫君は〈変化〉のない安らぎを常に求めており、今までその身に生じたあらゆる〈変化〉は、全て周囲によってもたらされたのである。姫君が幼い頃に継続を望んだ生活は、両親の死を境に一変してしまった。思えば男との婚姻も、乳母の用意した縁談話が始まりだったのである。急激な生き方の〈変化〉を拒む姫君が、一度は乳母の言葉に従って男の妻となり、〈変化〉を受け入れようとした。当初は身体を売ったも同然の結婚生活に寂しさを覚えるものの、たった八つで生涯を終えなければならなかった女の子の話を聞いた後には、これもまた自分の人生であり宿命なのだと考えて、男との暮らしの中に新たな安らぎを見出せるようになっていたのである。おそらくこの時点においては、乳母の勧めを承諾して〈変化〉を選択したことを、姫君自身結果的に満足していたのであろう。男の妻になるという〈変化〉は、無いよりはよかった。おそらく姫君は、「懶い安らかさ」の中でそう考えていたに違いない。

ところがある日突然に、姫君は男から暫しの別れを告げられるのである。姫君の次と定めた安らぎも、再び覆されることとなってしまった。思わぬ二度目の安らぎの崩壊に対し

て、姫君の歎きは当然の如く極まったことであろう。だからこそ「六年以前には、いくら泣いても、泣き足りないほど悲しかった」のである。そうして、身も心も消耗し疲れ果てた末に姫君の抱いた願望こそが「唯静かに老い朽ちたい」であった。重要なのは、「老い朽ち」る過程を「静かに」行うということである。つまりは、生きる足掻きの為に望みもしない〈変化〉を選択して、後に更なる苦しみを覚えるくらいならば、このまま無抵抗に滅びることを望むということである。もしもここで生活の為に他の男と再婚したとして、たとえ新たな安らぎを見出せたとしても、再び裏切られて苦しむ可能性が大いにあり得るのである。姫君はこの悲しみをきかっけに、一度は〈変化〉に対して“無いよりよかった”と思えた認識を、“無い方がよかった”と改め直してしまったのではないのだろうか。それ故の再婚拒否であり、二度の敗北を繰り返した姫君にはもはや、三度目の安らぎを求めて〈変化〉を受け入れるという選択肢などあり得なかったのである。

第四節　姫君の臨終と後日譚

姫君が乳母の勧めを拒絶したのと同時刻、男の方は父の目がねにかなった新しい妻と酒を酌んでおり、姫君のことを忘れかねていた。けれども姫君の身に起こった出来事については知る由もなかったのである。その後、男は姫君と別れてから九年目の晩秋になって、ついに帰京を果たすこととなった。約束の時からは実に三年以上も過ぎていたのである。そういえば、あの「気味の悪い話」に登場した旅人が再び宿を訪れて女の子の死を知ったのも九年目であった。女の子の話は、姫君が「宿命のせんなさ」に怖れる話として意味付けられるのみならず、後の姫君の運命の予兆としても機能していたのかもしれない。

男が急ぎ訪れた六の宮は廃墟と化しており、この時に至ってようやく男は姫君が追い込まれた状況を否応なしに理解するのであった。翌日から男は、姫君の安否を尋ねて一人で洛中を歩き回る。そして何日か後の夕暮れ、雨を避けるため立ち寄った朱雀門の軒下で、病に伏す姫君とそれを看病する乳母の二人を見付け出すのであった。

> 窓の中には尼が一人、破れた莚をまといながら、病人らしい女を介抱していた。女は夕ぐれの薄明りにも、無気味なほど痩せ枯れているらしかった。しかしその姫君に違いない事は、一目見ただけでも十分だった。男は声をかけようとした。が、浅ましい姫君の姿を見ると、なぜかその声が出せなかった。姫君は男のいるのも知らず、破れ莚の上に寝反りを打つと、苦しそうにこんな歌を詠んだ。
> 「たまくらのすきまの風もさむかりき、身はならわしのものにざりける」
> 男はこの声を聞いた時、思わず姫君の名前を呼んだ。姫君はさすがに枕を起した。が、男を見るが早いか、何かかすかに叫んだきり、また莚の上に俯伏してしまった。尼は、
> ――あの忠実な乳母は、そこへ飛びこんだ男と一しょに、慌てて姫君を抱き起した。しかし抱き起した顔を見ると、乳母は勿論男さえも、一層慌てすにはいられなかった。（p 49）

男は男なりに未だ姫君を想っていたが、予想をはるかに上回る姫君の「浅ましい」姿を目の前にすると暫し身動きが取れなくなってしまう。自らが離れたことによって姫君が辿ったであろう現実を、容易には受け止められなかったということであろうか。それでも男は、姫君が「苦しそうに」詠んだ歌を聞くと思わずその名を呼ぶのであった。この歌は原話にも同じく登場する歌であるが、この場合においては姫君の辞世の句と読み取ることも可能であろう。歌について、注釈は「以前は隙間風も寒かったが、今はこのようにしていても平気だ、もう習慣としてならされてしまったからの意」とする〔13〕。これは辛い状況に陥ってもなおその状況からの脱出や改善を求めようとはせず、ただただ身を置いて現状に留まり続けようとするような、正に再婚の拒絶を選択する姫君の在り様に沿った内容であるといえるのではないだろうか。この歌にみられる姫君の心境の表現は、諦めでも悟りでもない、このような在り方こそが紛れもない自分の人生であったのだ、とする人生の了解に他ならないように思われる。

原話の姫君は男の姿を認めるとそのまま失神して絶命するが、けれども小説の姫君は同じようには死なせてもらえない。姫君は男の姿を捉えると、「何かかすかに叫んだきり」、またうつ伏すことで男の姿を視界から消し去ろうと試みるのであった。姫君は男の妻になると選択した過去の自らの行動を過ちであると認識したことによって、その拒絶の対象を他の男との再婚話どころか、既に一度は容認した男にまでも定めてしまったのかもしれない。姫君は、自らを抱き起こす男に対しては何ら言葉を返すことなく死んでゆこうとするのであった。そして、これより先に語られる姫君の臨終の場面は、芥川のオリジナル部分も付加された、おそらくはこの小説において芥川が最も描き出そうとした場面である。考察を進めるためにも非常に重要となる箇所となるため、既に第一章でも取り上げた部分ではあるが、再びここに引用することとする。慌てた乳母から姫君臨終のための読経を頼まれた乞食法師は、偶然にも男と同じく雨を凌ぐため朱雀門に居合わせた人物であった。姫君は自身で念仏を唱えて往生を遂げるよう諭す法師の教えのままに細々と仏名を唱え出すが、後には自らの目に映る光景を報告し始めるのである。

「あれ、あそこに火の燃える車が。……」

「そのような物にお恐れなさるな。御仏さえ念ずればよろしゅうござる。」

法師はやや声を励ました。すると姫君はしばらくの後、また夢うつつのように呟き出した。

「金色の蓮華が見えまする。天蓋のように大きい蓮華が。……」

法師は何か云おうとした。が、今度はそれよりもさきに、姫君が切れ切れに口を開いた。

「蓮華はもう見えませぬ。跡にはただ暗い中に、風ばかり吹いて居りまする。」

「一心に仏名を御唱えなされ。なぜ一心にお唱えなさらぬ？」

法師はほとんど叱るように云った。が、姫君は絶え入りそうに、同じ事を繰り返すば

かりだった。

「何も、――何も見えませぬ。暗い中に風ばかり、――暗い風ばかり吹いて参りまする。」

男や乳母は涙を呑みながら、口の内に弥陀を念じ続けた。法師も勿論合掌したまま、姫君の念仏を扶けていた。そう云う声の雨に交る中に、破れ莚を敷いた姫君は、だんだん死に顔に変って行った。……　（p 49-50）

これも既に述べた通り、姫君が見たと言う「火の燃える車」は地獄からの迎えを、そして「金色の蓮華」は極楽からの迎えを象徴するものであった。けれどもこれらの光景はすぐさま姫君の目の前から消え失せ、その後の姫君は一貫して「何も、――何も見えませぬ。暗い中に風ばかり、――冷たい風ばかり吹いて参りまする。」と呟き続けて死んでいくのである。注目すべきは姫君が、目の前の「暗い」ことよりもただ「何も見え」ずに「風ばかり」吹いていることを繰り返し強調している点であろう。「何も見え」ないこと、要するにビジョンが何も立ち現れないということが、ここでは大きな問題となっているのである。

そもそも地獄とは、現世において煩悩を断ち切れず欲望のままに行動して生きた者たちが堕ちる世界であり、念仏とは、地獄に堕ちる可能性を自覚する者たちが、地獄堕ちの回避を望んで仏の慈悲に縋るという必死の行いであった。そして極楽は、世間一般には、仏教的な極楽浄土と伝説的な他界観が混ざり合って認識されたために、全てが満ち足りていて平和で苦しみのない清浄な世界と考えられ、そのような場所に生まれることを望む者たちが目指す世界であった[14]。しかしながら姫君は、こうなりたいというような未来像を抱かない人物なのである。現世と来世の双方の世界に対して、特に固執するものがないという姫君の性質が、地獄と極楽のイメージを消滅させてしまっているのであろうか。しかしながら、本当に姫君があらゆるものに対して固執していない人物とするならば、それこそ姫君は真の意味で成仏に至ることとなってしまうだろう。すなわち、やはり姫君には、何かしらのこうなりたいというイメージが確かにあったと考えられるのである。では、そのイメージとは一体何であるのか。作品を更に読み進めていくこととする。

この物語の最後を飾る第六節は、完全な芥川オリジナルによる後日譚となっている。姫君の死から何日か後の月夜、姫君に念仏を勧めた法師は朱雀門の前の曲殿で膝を抱えており、そこに悠々と何か歌いながら歩いて来た一人の侍が「この頃この朱雀門のほとりに、女の泣き声がするそうではないか？」と声をかけるのである。法師が「お聞きなされ。」と言うと「突然どこからか女の声が、細そぼそと歎きを送って来」、そしてまたどこかへと消えていく。「あれは極楽も地獄も知らぬ、不甲斐ない女の魂でござる。御仏を念じておやりなされ。」と法師は語るが、ところが侍は返事もせずに法師の顔を覗き込むやいなや、いきなり両手をついて平伏する。実はこの乞食法師は世にも名高い内記の上人であって、「やん事ない高徳の沙門だった」という種明かしで結びとなるのであった。

この後日譚に描かれた法師の言葉によって、臨終間際の姫君が地獄と極楽のビジョンを

思い描くことが出来なかった故に往生を遂げられなかったと解釈できるようになる。姫君のことを「極楽も地獄も知らぬ、不甲斐ない女」と称する法師は、何か相応しくない人柄であるために姫君が地獄や極楽に「行けぬ」のではなく、それを「知らぬ」ために双方の世界へ行けられなかったことを見事に察しているのであった。世間的に見れば通常といえるだろう死のビジョンを持ち合わせていない姫君は、その代わりとなる死のビジョンもなしに、ただ「静かに老い朽ちる」という過程のみを重んじていたのである。そのような性質では、確かにビジョンを立ち現すことは不可能に近いのかもしれない。自らの結末について何も望もうとしない姫君の、その最期の心象風景は何にも残っていなかった。ただ風ばかりが吹いており、何のビジョンも存在していない。だからこそ、救いもあり得ない。これが真相なのだろうか。

しかし気になる点はやはり残る。自分が目にする光景の単なる報告であれば、それを過度に繰り返す必要はないであろう。しかし姫君は、「何も、――何も見えませぬ。暗い中に風ばかり、――冷たい風ばかり吹いて参りまする。」という言葉を繰り返し呟き、そのまま「だんだん死に顔に変つて」行くのであった。その様子から窺えるのは、姫君自身、この思わぬ事態に困惑しているということである。つまりこの事態は、姫君自身にとっても全く思いもよらない事であり、また望まぬ展開でもあったのではないだろうか。すなわちこの瞬間において、姫君はまたも想定外の衝撃を受けることとなってしまったのである。これは一体どういうことなのか。姫君の描写ばかりの追及では正確な判断が出来ない以上、この結末に大きく関わる作者芥川の意図について、三章では迫ることとしてみたい。

第三章　「六の宮の姫君」の背景について

「六の宮の姫君」に登場する姫君の生き方は、これまでの研究においてどのように評価されてきたのであろうか。第三章においては、まず小説について過去の評価や先行研究を明らかにした上で、芥川の創り出そうとした姫君像の解釈を改めて行うこととする。また小説の議論を行うにあたっては、作者である芥川の思惑を無視することも到底出来ない。よって、芥川の他の作品や手紙の記述、そして記録に残された発言などについても言及をしながら、芥川がこの小説を題材として書きたかったことは何であるのか考察を進め、最終的には芥川の生涯を貫く文学的なテーマについて迫ることを試みたい。

第一節　先行研究について

「六の宮の姫君」についての評価は当初、その作品の内容部分に踏み込むよりもむしろ、文芸作品としての自立性と価値をめぐって論争がなされていた。作品を積極的に評価する見方と、消極的もしくは否定的に捉える評価とが真っ向から対立していたのである。この論争は堀辰雄氏[15]が「いかにも華やかなしかも寂しい、クラシツクの高い香を放つた、何とも言へず美しい」作品で「最上の傑作」であると評価したのに端を発しており、続く室生犀星氏[16]もまた「典型的な小説美」と称賛するのであった。しかし後に、吉田精一氏[17]はこの作品の原話が『今昔物語集』にあることを指摘した上で、『今昔物語集』の中でも最も悲劇的で印象深い作品である原話に注目した芥川の眼光の鋭さを評価するが、「ただ原話がすぐれてゐるだけに、彼の手柄はそれだけ少い」と述べている。更には長野嘗一氏[18]も、「芥川独特の手柄といえば、この原典に眼を着けた鑑賞眼と、それを手際よくまとめたこと、女主人公の思想や性格をいちだんと闡明にしたこと、及び洗練された文章を列挙すべきである」として「酷評すれば今昔物語の現代語版ともいえる」という論を展開するのであった。

けれども今日に至っては、海老井英次氏[19]の「『死んだって死にきれぬ』との心理的共鳴をモチーフとした、原話とは別の作品的世界」である点に小説の自立性をみる説から再評価が行われ始め、ある程度の創作性は認める結論に落ち着いている。どうやら小説の内容が原話にあまりに近似していることが賛否両論を招いたようであるが、以上の論争は、本論において問題となっている姫君個人についての人物評価と、その作中における位置づけに関わる評価にも大きな影響を及ぼしたと思われる。原話からの自立性が乏しいとして作品の評価が抑制されていた頃、姫君は方向性を見失って生きる芥川が、自己を投影して描いた精神的自画像であると論じられる傾向にあった[20]。つまりは芥川の創作力の減退と、主人公である姫君の自立性のなさとが重ねて解釈される傾向にあり、姫君自身は「呪われた運命の支配下に置かれた弱い女性[21]」や「はっきりとした自我を持たず、生活意欲の無い女[22]」などと、原話の姫君とそう変わらない人物像として評価されていたのである。

再評価のきっかけをつくった海老井氏[23]は、芥川が「死んでも死にきれぬ」という「残

余未練の存在を姫君の中に見透し」たために、最期には「中有の闇」に沈むという、「原話とはなれた芥川の理念による姫君」を描いたのだと主張し、また作中の法師が後日譚で述べた「あれは極楽も地獄も知らぬ、腑甲斐ない女の魂でござる。御仏を念じておやりなされ。」という言葉こそが、「芥川自身の姫君の理解」であったとする立場を示している。このように再評価後の先行研究では、法師の言葉を芥川自身の言葉として捉える見方が多く、そのため姫君についても、作者の言葉通りの「腑甲斐ない女」であるという認識を出発点にして人物解釈の議論が進められる場合が多かった。たとえば勝倉壽一氏[24]は作品について、「ただ頼ることによってのみ生を維持してきた姫君の、自らは運命の転変にも、生活の困窮にも、結婚問題にも積極的に関わることなく、周囲の動きのままに翻弄されるばかりで、前司の愛を受け入れて幸福を見い出そうとする努力も、夫の帰還を待ち続ける強い意志も、往生を乞い願う気力さえも持ち合わせなかった、『腑甲斐ない』生と死を語ることが構想の中核をなして」いると述べている。しかし果たして本当に、小説は読者が姫君のことを「腑甲斐ない女」と感じるように描かれていたであろうか。

これについて佐々木雅發氏は、「六の宮の姫君」全体において姫君の内面が朧化されていることを指摘しつつ、姫君が決して主体性の無い人物として描かれてはいないとして先の研究に反論し、姫君の位置付けについては次のように述べている[25]。

> たしかにこの一種先天的な無関心と無気力――。人の世が認める価値の中に生きることに対する、さらには生存そのものに対する無関心と無気力。だから人にも判からず、自分にも判からず、とはどんな価値判断にも染まらずに、しかも彼女だけの世界に生きる鉄壁の孤独。そして序に言えば、姫君はまさにその絶対的な孤独において、つまりその現実にはなんの役にも立たない無垢性、高貴性において、やはり生まれながらの貴種であったといわなければならない。(「芥川龍之介　文学空間」 p 327)

> むしろ姫君はその都度その都度まさに精一杯に生きていたので、しかし精一杯に生きていたからこそその都度その都度報われず、だから無意味なものの生起としてしかたちあらわれない人生の日々を、姫君は果てまで歩いてきたのである。つまり＜意味＞なるものからついに隔てられた人生、あるいは人生の〈意味〉をついに把ええぬ魂の姿――。そしてこう考えるとき、はじめて姫君の木偶のような不得要領の正体が、我々自身のものであったことが判かるのである。(「芥川龍之介　文学空間」 p 344-345)

以上の先行研究を踏まえて、批判を行いつつも新たに姫君の人物像を考えようとするのならば、やはり二章において明らかとなった〈安らか〉であることに強い拘りをもつという姫君の性質こそ、議論の要として欠かせないであろう。物語全体を通してみても、姫君は決して主体性とか自我のない人物であるようにはみられない。むしろ、この小説全体を通して描き出されているのは、積極的には何も望もうとはしないという姫君の本来の生き方

と、その結末の悲劇性なのではないだろうか。

姫君の生涯の語られ方をみると、幼い頃は両親に対して強いまでの感情は抱かないながらも、現状維持を願う姿勢を垣間見せており、そこにはもう何かしらの姫君の意志が形づくられていることがわかる。そして父母の死後、今までと違う生き方を選ばざるを得ない状況の中で姫君は、不本意な展開に嘆きつつも乳母の言葉に従い、男との結婚生活を受け入れるのであった。そして後には宿命を自覚することで、それまでの自らの人生を主体的に引き受けたのである。もはやこの時点において、姫君自身の意志とか自立性とかいうものが育まれていることは明白であろう。このとき、姫君の内面は僅かであるが変化をみせた。「悲しみも少いと同時に、喜びも少い朝夕だった」という男との生活にみられた描写が何よりもそれを表している。けれども「懶い安らかさの中に、はかない満足を見出」せていた日常が男の突然の言葉によって崩れ去ることで、姫君は〈変化〉を求めることで孰れは更なる苦しみが生じてしまうことと、更には「安らかさ」が一層遠のいてしまうことを否応なしに再確認してしまったのである。

その後、生活が再び辛くなる中で姫君は乳母による再婚の勧めを断った。目の前で乳母が以前と同じように生き延びるための道を示しているというのに、それを拒絶して滅びを選択した姫君の内面は、もはや「無関心」でも「無気力」でもいられなかったことであろう。乳母の言葉を拒むあたり、姫君は「周囲の動きのままに翻弄されるばかりで」もない。また、再婚という〈変化〉に苦悩するくらいならば「ただ静かに老い朽ちたい」と願う姿からは、「死んでも死にきれぬ」という未練があったようにも思われないのである。姫君の〈変化〉のない安らかさを求める様子が幼い頃から既にみられていたということは、つまり自分の生き方のようなものを最初から培っていたということであり、その意味で確かに姫君の性質は「一種先天的」とも捉えられるであろう。「昔と少しも変らず」に単調な遊びを常に繰り返していたということは、すなわち幼少の頃より無意識のうちに、姫君のこうありたいと望む生き方の姿が漠然と存在したのであり、その生き方の片鱗が「昔のように」変わらず繰り返すという行為のかたちで露わとなっていたのではないだろうか。

そして男との別れをきっかけにして、生き方を変えようとする自らを律した姫君は、自分本来の生き方に向かって行こうとする決意を固くしたのである。そこには果たして、本当に「無意味なものの生起としてしかたちあらわれない人生の日々」を送って「人生の〈意味〉をついに把ええぬ」姫君の姿があるであろうか。世間一般では常識とされる生き方が他にある中で、姫君は紆余曲折の末に自分の生き方、もしくはその最期の在り方を自ら選択したのである。幼少期の「悲しみも知らないと同時に、喜びも知らない生涯だった」とする姫君の在り方は、そのまま維持されて、最期の「極楽も地獄も知らぬ」状態の姫君へと繋がったのではないのだろうか。つまり芥川は、この小説に「姫君の無為な生の営みを描〈26〉」いているのではない。生涯を通じて自らの本来の生き方を貫いてしまったが為に、滅びに向かわざるを得なかったという姫君の最期を描き出そうとしたように思われる。しかし、そういう人生を歩んだ姫君を「腑甲斐ない女」としか捉えない現実もまた、客観的

に見れば確かなのであろう。

では、後日譚において芥川が法師に「あれは極楽も地獄も知らぬ、腑甲斐ない女の魂でござる。」と言わせた意図は一体何であろうか。本当に、芥川は自らの姫君に対する評価を法師の言葉にそのまま反映させたかは疑問に思うところである。姫君に向かって一心に念仏を唱えるよう諭し続けた乞食法師は、実は「高徳の沙門」であったという。わざわざ法師を仏教界の権威であったと説明することは、すなわち法師が仏教を人並み以上に信じて極めていた人物であるということの強調に他ならないであろう。そのような人物が、姫君の死後に尚も朱雀門に留まって「女の声」に耳を傾けていたのである。この場面においては、もう姫君の死に立ち会った男も、そして忠実だった乳母も、何処かへ行ってしまったのか姿がみられない。つまりは法師ただ一人だけが、歎きを送る「女の声」にずっと耳を傾け続けていたのである。

法師は、語りかけてきた侍に対して「御仏を念じておやりなされ。」という言葉を繰り返す。「御仏を念じ」たところで、自分で念仏を唱え続けなかった姫君の魂が往生できないことを既に知っているはずの法師だが、それでも仏教を信じる身としては、念仏による往生を促す他に方法がないということであろうか。侍に向けられた言葉は実は法師自身に向けられた言葉であるとも受け取れるが、しかしその姿は決して滑稽や皮肉なものとして映るのではなく、仏門の境地に至った高徳の僧という立場の人間として、仏教では救済の及ばなかった姫君の魂と対峙しているように思われる。「御仏を念じ」ることを繰り返す描写からは、法師が姫君の魂の救済されることを切に願っていたことが推し量られるであろう。それは姫君の愚かさをただ憐れんで救済を求めているわけでも、また往生させられなかったという個人的な自責の念の為に救済を求めているわけでもない。姫君の人生の在り方に誰よりも敏感に気付いてみせた法師は、その生き様のために仏教の範疇では慈悲の及ばない姫君の嘆きと向き合い、どうにかその苦しみから姫君を救うことが出来ないか、不相応な念仏を続ける無力感の中で、願わずにはいられなかったのである。

乞食法師は、作者の代わりに「姫君の生の愚かさと哀れさを見詰める[27]」だけの存在なのではない。むしろ芥川が期待したのは、自らを救済が必要な存在であると認識せず、危機感に駆られなかったため念仏に縋らなかった姫君を「腑甲斐ない女」として一言のもとに切るような発言をしてみせながら、尚もその魂の在り様に寄り添おうとする高徳の法師の行為に含まれたやりきれない矛盾を、読者が感じ取ることにあったのではないだろうか。

けれどもやはり疑問は残る。自分から何も選ぼうとしないような傾向の人は、世の中にも確かに存在する。そのような何も望もうとしない姫君が、自らの本質のままの生き方を貫いた結果として、魂ごと救われないという悲劇的な結末を迎えるのは何故なのだろうか。姫君の在り様を見届けようとしたら自然とこういう結末になった、というだけでは芥川の意図を把握したことにならないであろう。そもそも、芥川がわざわざ姫君のような女性を自らの作品の題材としたのは一体何故なのであろうか。以降は芥川にとって執筆された他の作品も参考として用いつつ、考察を進めてみることとしたい。

第二節　女性と時代背景

芥川は、この小説を書くことで一体何を表そうとしたのだろうか。「六の宮の姫君」の発表直後、芥川は渡辺庫輔宛書簡（1922.7.30 付）の中に、「一夕話は一夜漬なり但し僕は常にあの小ゑんの如き意気を壮といたし六の宮の姫君の如きを憐むべしと致し候」という一文を残している。「一夕話」（「サンデー毎日」大正 11.7.30）とは「六の宮の姫君」の一ヶ月前に発表された小説のことであり、「小ゑん」とは、その小説に登場する女性のことである。芥川本人によって、同時期に執筆された両作品の登場人物を比較した感想が述べられている以上、「一夕話」について言及しないわけにはいかないであろう[28]。

「一夕話」は六人の男による酒の席での会話を主にした小説であり、その中で、登場人物の一人である和田が、その場に居ない知り合いの若槻という通人と、その以前の「囲い者」であった小えんという女性の二人が別れたいきさつについて語り出すのであった。小えんは長らく通人の世話になっていたものの、乱暴者として名高い浪花節語りの下っ端に身を任せて、通人と別れたというのである。和田は、当初は「小えんの愚を哂わずにはいられな」かったものの、「あの女と別れるくらいは、何でもありません」とする若槻の姿勢を見るうちに次第に「小えんに対する同情」を覚えるようになり、「上品でも冷淡な若槻よりも、下品でも猛烈な浪花節語りに、打ち込むのが自然だと考え」るとして、和田は彼女の行動を是認し、最終的に「呪わるべきもの」は「小えんをそこに至らしめた、通人若槻青蓋だ」と言って通人を罵倒するのであった。

> 昔から喉の渇いているものは、泥水でも飲むときまっている。小えんも若槻に囲われていなければ、浪花節語りとは出来なかったかも知れない。
> 「もしまた幸福になるとすれば、――いや、あるいは若槻の代りに、浪花節語りを得た事だけでも、幸福は確に幸福だろう。さっき藤井がいったじゃないか？我々は皆同じように、実生活の木馬に乗せられているから、時たま『幸福』にめぐり遇っても、摑まえない内にすれ違ってしまう。もし『幸福』を摑まえる気ならば、一思いに木馬を飛び下りるが好い。――いわば小えんも一思いに、実生活の木馬を飛び下りたんだ。この猛烈な歓喜や苦痛は、若槻如き通人の知る所じゃない。僕は人生の価値を思うと、百の若槻には唾を吐いても、一の小えんを尊びたいんだ。
> 「君たちはそう思わないか？」　（「一夕話」 p 38）

小えんの旦那である通人は実業家で、また「風流愛すべき好男子」でもあった。けれども風流な諸芸を仕込ませるばかりの通人に自分への「猛烈な執着」のないことを察した小えんは、通人とは正反対の人物ともいえる浪花節語りのもとへ行ってしまう。浪花節語りが悪い噂ばかりのある男であるために、小えんの行動は一見愚かとも捉えられる。事実、通人と一緒であった頃の贅沢な暮らしは、もう小えんには望めないものとなってしまったであろう。けれども今以上の「幸福」を摑まえるため「一思いに、実生活の木馬を飛び下り

た」小えんの姿勢は、別れの経緯を客観的にみた和田によって、ある程度の理解と同情が示されるのであった。このように、「一夕話」に登場する小えんは豊かな生活よりも強い愛情に生きようとして行動する、非常に能動的な女性として描かれている。そのような小えんと姫君とを比較して、芥川は「常にあの小ゑんの如き意気を壮といたし六の宮の姫君の如きを憐むべしと致し候」と述べたのである。小えんのような積極的な心持である「意気」を「壮」、つまりは活力があふれて勇ましい充実したものと捉え、一方では姫君の方を「憐むべし」姿と捉えた。もちろん、芥川は小えんの行為そのものについては積極的に評価するわけではなく、その意気込みを何より評価してみせているのである。ただ単純に芥川が小えんに「壮」という理想を見、また姫君には「憐む」べき現実を見たという判断を下すのは危ういであろう。

芥川の発言の真意は何処に在るのか。「一夕話」では小えんと通人の別れ話が描かれているのみであって、その後小えんがどうなるのかといった、生涯を終えるまでの物語までもが描かれているわけではない。もしかしたら後々は、小えんも辛い日々を過ごして嘆き悲しむ可能性が大いにあり得るのである。それに、何も小えんが能動的であるのに　対して姫君が受動的な女性として描かれているわけでもない。姫君は自身の本質に沿った生き方を貫こうとし、けれども結局は救われない結末に終わってしまった女性である。ここで注目すべきなのは、小えんと姫君、それぞれが価値を見出した生き方の相違点なのであろう。

小えんは異性からの強い愛情の獲得を何より望み、通人に囲われる安穏とした「実生活の木馬を飛び下り」たことで、その先の未来はどうであれ、現在においては前の暮らし以上の「幸福」を掴み取ろうと現に行動したと言える。そしてこのような勢いのある性格の持ち主であるのだから、おそらく小えんは、この先も自らの意志に従って行動し、必要とあらば再び「実生活の木馬を飛び下り」ることを躊躇しないのであろう。

対する姫君の方はどうであろうか。あらゆる「変化」を望まない姫君にとっては、そもそもの問題として、どう足掻いても変わらずにはいられない流動し続ける人生こそが苦悩の根源となってしまっている。「実生活の木馬を飛び下り」ることなど言語道断。まして姫君は、時として訪れる「実生活の木馬を飛び下り」ざるを得ない状況下での判断に苦しむという以前に、「皆同じように、実生活の木馬に乗せられている」という前提条件すらも問題視しているのである。小えんの場合は、今以上の「幸福」を求めるためリスクを冒して行動した。けれども姫君の場合、一度選択してみた試みに失敗した上で、もうこれ以上は悪くならないようにと、一切の選択することを放棄するという生き方そのものを、選び取るに至ったのである。生きて「実生活の木馬に乗せられている」限り、自らの選び取った生き方の方が幸福であるという保証は何処にもなく、いずれは全てが空しく終わってしまうことを姫君は察していた。このように考えてみると、小えんと姫君が抱える問題の深刻さが大いに異なっていることがわかる。考え方としては、姫君の方が小えんよりも少し先を行っているようにも思われるが、もしかしたらそのような点に、芥川の二人の女性に対する評価の違いが表れたのではないだろうか。

芥川は後に、「六の宮の姫君」を第六短篇集「春服」の巻頭に収録した一方で、「一夕話」は単行本に収録しなかった。つまりは、「壮」とする小えんよりも「憐むべし」とした姫君の方に、芥川自身は何かしら大きな意味を見出していたのである。それは、自らの人生を何ら深刻なものとして捉えることなく、頼りのない自信をもって日々を漫然と生きる若槻のような浅はかさに対して、小えんは自らの生き方と向き合い一つの選択をしてみせたということ、そして何より姫君は、人生そのものが苦しみであるということを思わないではいられなかったという点で、芥川は評価していたのではないのだろうか。

ここで、新たにもう一つ他の作品を取り上げてみることにしたい。「六の宮の姫君」の執筆から二年後、芥川は姫君についての話題を扱った小説「文放古」(「婦人公論」大正 13.5)を書き上げた。「文放古」は、ある若い女性が東京の女友達に当てた、結婚問題に悩んでいるという内容の文放古を「わたし」である芥川が公園で拾い、その全文を「一字も改めずに」紹介した上で感想を述べるという形式になっている。ろくな結婚相手がいないのに自活する能力がないのだから「あたし」は結婚するしかない。このような教育を受けた女性の「結婚難」は全国的だというのに、日本の小説家に「あたしたちの代弁者」はおらず「一人残らず盲目」なのだと手紙は述べ、「芥川龍之介と来た日には大莫迦だわ。あなたは『六の宮の姫君』って短篇を読んではいらっしゃらなくって？」と書かれている。それに続く芥川の作品批評という体で、姫君に関わる記述が以下のようにみられるのであった[29]。

> 作者はその短編の中に意気地のないお姫様を罵っているの。まあ熱烈に意志しないものは罪人よりも卑しいと云うらしいのね。だって自活に縁のない教育を受けたあたしたちはどのくらい熱烈に意志したにしろ、実行する手段はないんでしょう。お姫様もきっとそうだったと思うわ。それを得意そうに罵ったりするのは作者の不見識を示すものじゃないの？　あたしはその短編を読んだ時ほど、芥川龍之介を軽蔑したことはないわ。……」
>
> この手紙を書いたどこかの女は一知半解のセンティメンタリストである。こう云う述懐をしているよりも、タイピストの学校へはいるために駆落ちを試みるに越したことはない。わたしは大莫迦と云われた代りに、勿論彼女を軽蔑した。しかしまた何か同情に似た心もちを感じたのも事実である。彼女は不平を重ねながら、しまいにはやはり電燈会社の技師か何かと結婚するであろう。結婚した後はいつのまにか世間並みの細君に変るであろう。浪花節にも耳を傾けるであろう。最勝寺の塔も忘れるであろう。豚のように子供を産みつづけ――わたしは机の抽斗の奥へばたりとこの文放古を抛りこんだ。そこにはわたし自身の夢も、古い何本かの手紙と一しょにそろそろもう色を黄ばませている。……　(「文放古」 p 388-390)

この文放古を書いた若い女性は、芥川が「意気地のないお姫様」を「熱烈に意志しないものは罪人よりも卑しい」として「罵っている」のだと判断し、嫌悪感を露わにしている。

おそらくこの批評は、作者である芥川が内記の上人の言葉を借りて姫君のことを「腑甲斐ない女」と批判している、と捉える立場に立っているのであろう。しかしそれでは、既に述べた通り、完全な芥川の作品理解とは言えないだろう。実際の所、手紙を書いた女性を「一知半解のセンティメンタリスト」であると言い切った芥川の反応からも、このような批評の内容には不服があるという印象を受ける。この批評が実際に存在したものなのかは定かでないが、もしかしたら作品発表当時、「六の宮の姫君」に対する世間的な評価は辛辣なものであったのかもしれない。それでは、芥川が姫君の生き様に託した本当の意味や役割とは、一体何だったのであろうか。

女性解放が叫ばれた大正時代、たとえば大正九年には全国タイピスト組合や新婦人協会が発足し、大正十一年からは恋愛の自由をうたった厨川白村の『近代の恋愛観』が一世を風靡した。けれども芥川が生きた当時、未だ数多くの女性が自由のない苦しい立場にあったことが上の文章によって明らかとなる。「自活に縁のない教育」を受けた女性たちは、「どのくらい熱烈に意志し」ても自活を「実行する手段」がないのだから、生活のためにも不本意な結婚をしなければならない。このような悩みは、まさに「六の宮の姫君」でも扱われた問題ではなかっただろうか。「お姫様もきっとそうだったと思うわ」と女性が述べるほどに、姫君と当時の女性が抱えた結婚問題の悩みには類似するものがあったのである。平安朝の姫君に関わらず、大正時代の女性の方もまた「自活」の「手段」を見付けるのが困難であり、尚且つ階級社会としての家父長制のために、自立が困難で周りの情勢に左右される状況にあった。そのような状況下では、女性に一体どのような生き方があり得たのだろうか。芥川は、このような自問自答を出発点にして「一夕話」や「六の宮の姫君」の執筆を思い立ったと考えられる。

芥川の「豚のように子供を産みつづけ――」という表現は、高慢な女性蔑視というよりもむしろ、客観的な視点のもとでの冷静すぎる見解故の発言であるように思われる。自分の人生について考えをめぐらせ、思い悩んでいるという点においては芥川もこの若い女性を評価しているのであった。けれども文句を言うばかりで行動に移さない「一知半解のセンティメンタリスト」に対しては何処か突き放した見方をし、また同時に、所詮選べる結婚相手の選択肢も限られているだろうことを思って同情するのであった。

ここにみられる芥川のあまりの傍観者振りは自分自身の言及に際しても徹底されており、最後の「わたし自身の夢も」机の奥で「そろそろもう色を黄ばませている」とする語りからは、もはや同情からもかけ離れた空しさを強く感じさせる。手紙の女性に不満を覚える芥川であるが、しかしそれでは自分はどうなのかと、自嘲的な様子で自問自答しているのであった。「駆落ちを試みるに越したことはない」と言いながらも、芥川は「不平を重ねながら、しまいにはやはり電燈会社の技師か何かと結婚するであろう」との予測に落ち着かずにはいられない。前者の行動からは「一夕話」の小えんの勢いある積極性が連想されるが、思うに現実世界において小えんのような選択の出来る者などごく僅かしかいないであろう。多くの場合は妥協を強いられて、自らの理想とする生き方を諦めなければならない

だろうということを芥川は承知していたのであり、自分自身もまた、手紙の女性と同様の叱咤を受けるべき存在として批判的に捉えていたのである。

芥川が「文放古」において示そうとしたのは、自分は別に姫君が悪いという意識をもって「六の宮の姫君」という小説を書いたのではない、ということであった。芥川はその生涯において、女性の苦しみについて特別何か意識するようなことはなかった。芥川にしてみれば女性的な苦しみは人間相対的な苦しみの内のひとつであって、一つの問題として区別し扱うようなこととは考えていなかったのである。「一夕話」や「文放古」、加えて「六の宮の姫君」といった作品は、かたちとしては女性の抱える社会的な問題を取り扱った小説であるようにも思われるが、おそらくは芥川が自らを含めた人間の相対的な苦しみについて関心を寄せた際、その一つの視点として女性的な苦しみの問題にも歩み寄った結果として作り上げられた作品群、といえるのではないだろうか。

ちなみに芥川の随筆である「澄江堂雑記」[30]（「新潮」大正 11.4）には、「歴史小説」について次のような文章が述べられている。

> 歴史小説と云う以上、一時代の風俗なり人情なりに、多少は忠実でないものはない。しかし一時代の特色のみを、――殊に道徳上の特色のみを主題としたものもあるべきである。たとえば日本の王朝時代は、男女関係の考え方でも、現代のそれとは大分違う。其処を宛然（えんぜん）作者自身も、和泉式部の友だちだったように、虚心平気に書き上げるのである。この種の歴史小説は、その現代との対照の間に、自然或（ある）暗示を与え易い。メリメのイザベラもこれである。フランスのピラトもこれである。
> しかし日本の歴史小説には、未だこの種の作品を見ない。日本のは大抵古人の心に、今人の心と共鳴する、云わばヒュマンな閃きを捉えた、手っ取り早い作品ばかりである。　（「澄江堂雑記」歴史小説 p 177-178）

これを踏まえると、つまり芥川は「古人の心に、今人の心と共鳴する、云わばヒュマンな閃きを捉えた、手っ取り早い作品」として『今昔物語集』の説話に自らの創作のための典拠を求め、大正当時に存在した女性をめぐる社会問題と、また自らが深く抱える生き方に対する思惑やこだわりとの折り合いを意識しながら、「六の宮の姫君」を執筆していったと読み取ることが出来る。そして、姫君にはどのような生き方があり得たのだろうか模索した上で、遂には独自の結末を用意するに至ったのだと考えられるのである。

第三節　芥川龍之介について

芥川が「六の宮の姫君」を執筆するにあたって最も描き表したかったものは、姫君の、これ以上新たなものは何も求めようとしない生き方を貫き通してみせたものの、結局は滅んで永久の苦しみに陥ってしまうという人生そのものであった。しかしそれでは、二つの疑問が残ってしまう。一つ目は、何故芥川が所詮報われないと理解しながらも、自らの性

質としての生き方を貫く生き方に拘ったのかということであり、そして二つ目は、何故そのような生き方を貫いた姫君の魂は救済されなかったのか、という本論全体に関わる疑問である。よってこれより先は、この二つの問いについて順に考察していくこととする。

芥川自身は、その人生を送る上でどのような意識をしていたのだろうか。先ずは芥川が文壇で活躍した当時の時代背景について、海老井氏による説明〔31〕を参考として挙げたい。

> 明治四十三年（一九一〇）から昭和二年（一九二七）までの文学を貫流しているのは、＜自我＞の絶対化という方向性を中軸に展開された個人主義思潮であったとみられる。近代市民社会としてはもとより未成熟であり、多くの前近代的なものを残存させつつ、急速な近代化の推進過程をたどった、昭和二十年（一九四五）までの日本の社会情勢の中では、小説家達も、その創作活動の上では当然のこと、一人の＜人間＞としても自信をいかに近代的な存在（市民）として確立するか、すなわち、＜人間としての自由＞を実現し生きてゆくかという課題を、必然的に負わざるを得なかったのであった。
>
> とりわけ、芥川龍之介達のように、明治前半期の激動期を過ぎて、未成熟ではあっても比較的安定した市民社会の成立をみた明治四十年代以降に成人となり、大正時代の展開につれて文壇生活をすることになった世代にとっては、＜自我＞の確立、＜自分＞の世界の樹立、＜私＞の人生の完成は、他の何にも換え難い関心事であり、彼らの文学の核を形成する命題だったと言えるのである。
>
> （『芥川龍之介論攷―自己覚醒から解体へ―』ｐ1）

芥川が生きた当時は、時代的な要請として自我の確立が、すなわち人間としての自己を充実させることが求められていた。このような時代背景に芥川もまた少なからず影響を受け、自己の追求というものに関心を抱き、ついには自らの作品において個性のままに生きる登場人物たちを描くことに繋がったのではないだろうか。芥川の初期の作品である「貉」（「読売新聞」大正 6.4）の中には、「我々の内部に生きるものを信じようではないか。そうして、その信ずるものの命ずるままに我々の生き方を生きようではないか」という記述がみられる。「内部に生きるものを信じ」て「我々の生き方を生き」ることは、まさに自己の追求をしようとする姿勢に他ならないだろう。

そして以上のような意識は、芥川の作品の登場人物からも読み取ることが出来る。たとえば「羅生門」（「帝国文学」大正 4.11）に登場する下人は、自己保存という生きるためのエゴイズムよりもむしろ、精神の充足という人間のエゴイズムを体現する存在として描かれており、あらゆる価値観に縛られることなく満足を求めて、自己の湧き上がる衝動のまま盗人にもなるという在り方を示してみせていた。また「地獄変」（「大阪毎日新聞」大正 7.5）に登場する良秀は、絵師として画道を究める性分のあまり、溺愛する一人娘が焼け死ぬ光景を目にした際にも、「さながら恍惚とした法悦の輝き」を浮かべてその場に佇み、魂

を奪われたように見入って、厳かな雰囲気を纏わせる姿が描かれている。そして地獄変の屏風を完成させた後には、娘の後を追うようにして縊れ死ぬのであった。

上記のような場合において、芥川は登場人物の持ち得る性質について思いを馳せた上で、その人物が自らの性質のままに行動したその果てまでをしっかりと見届けようとしていたのである。たとえその在り方を貫いて行きつく先が身の破滅であっても、生き方を誤魔化さずにひたすら「我」のままに生きようとする姿勢こそが、人として何か大きな価値を持つと考えていたと思われる。そのような芥川の創作の姿勢からは、何のために生きるのかと悩み苦しみつつも人間に対する好奇心は抱きつづけ、尚且つその在り方にはどこか肯定的であったような印象を受けるのである。芥川は、自らの人生の苦悩に思いを馳せながら、それでもなお生き方を変えられず、愚直にも自らの本質としての在り方を貫くような姿勢に人間的な姿を見出して、一種の憧れを抱いたとも考えられる。

ところで芥川自身は、自らの人生の在り方をどのように評価していたのであろうか。芥川の遺稿である「或阿呆の一生」（昭和 2.10「改造」）は、たとえ虚構の作品であるとしても、そこに語られるのは一応の芥川の人生回顧であるのだから、本人すら意図しない本音を反映させることも当然のことながらあり得るであろう。ここでは三十五項目の「道化人形」の他に、「歯車」（「大調和」昭和 2.6）の記述をも取り上げて考察する[32]。

> 彼はいつ死んでも悔いないように烈しい生活をするつもりだった。が、不相変養父母や伯母に遠慮勝ちな生活をつづけていた。それは彼の生活に明暗の両面を造り出した。彼はある洋服屋の店に道化人形の立っているのを見、どのくらい彼も道化人形に近いかと云うことを考えたりした。が、意識の外の彼自身は、――言わば第二の彼自身はとうにこう云う心もちをある短編の中に盛りこんでいた。
>
> （「或阿呆の一生」道化人形 p 464）

> それはある郊外にある僕の養父母の家ではない、ただ僕を中心にした家族のために借りた家だった。僕はかれこれ十年前にもこう云う家に暮らしていた。しかしある事情のために軽率にも父母と同居し出した。同時にまた奴隷に、暴君に、力のない利己主義者に変り出した。……（「歯車」 p 382）

「道化人形」で述べられている「ある短編」が実際の所どの短編を指しているのかは定かでないため、今回の議論では据え置くこととする。上の二つの文章から察せられるに、芥川の過ごした半封建的な家庭生活は、本人にとって大分窮屈で拘束されたものであった。「いつ死んでも悔いないように烈しい生活」を望みつつも、「遠慮勝ちな生活」を送らなければならなかったという理想と現実との乖離には、やはり芥川自身も、非常に苦しめられたということなのであろう。自らを「道化人形」と重ねて考え、「奴隷に、暴君に、力のない利己主義者に変」わり出すと説明する様子からは、芥川が自らの判断で以って「生き方」

を追求出来ないもどかしさを感じていると同時に、それが世間一般に黙認された決して逃れられない不条理であるのに気付いて、違和感を露わにしているように推測される。

芥川は、生後まもなくして実母が発狂したために、母の実家である芥川家に引き取られて育てられた養子であった。そして結婚問題に関しては、吉田弥生との一件において大正三年頃に初恋を自覚して相手との結婚を思いつめるまでに至ったものの、養父母と伯母の激しい反対にあって破局を迎えている。もしも家と衝突して絶縁されるという事態に陥れば芥川の生活は成り立たず、それこそ身の破滅となってしまうために、その時の芥川には選択肢などほとんど無かったことであろう。大正七年には芥川家の眼鏡にかなった塚本文と結婚するものの、新妻を弁護すべきときですら叱責する伯母に気を使い、妻に小言を言わなければならなかったことを後で自嘲気味に語る有様であった〈31〉。

現実世界において生き続ける上では、自らの生き方を貫き通すことは困難を極める。そのように考えたからこそ、芥川は自分の代わりに「いつ死んでも悔いない」人生を送る個性的な登場人物を作品に描き出すことで、自分なりの「自我の確立」を試み、生きる意味の模索を続けようとしたのではないだろうか。

芥川は、家庭生活からの束縛や姉の夫の自殺問題の処理、そして女性関係の問題に欲望や我儘を通すことが出来ない抑圧された精神状態、はたまた狂人の子であるという自覚による狂気への宿命的予感や健康面での問題など、文学上、社会上、健康上の様々な要因によって疲労と倦怠に苛まれた末に、遺書「或旧友へ送る手記」の中に「何か僕の将来に対する唯ぼんやりとした不安である」という動機を書いて、昭和二年七月二十四日に服毒自殺した。その原因については様々な論考がなされているが、今回の議論には直接関わらないので考察は控えることとしたい。取り敢えずは芥川が、その人生をかけて人間としての在り方を問題視していたことだけは確かであるように思われる。そしておそらくは「六の宮の姫君」においても、単なる自分らしさに拘る生き方というよりかは、自らの人間らしさに直結する自分らしさを貫くための生き方が、他の作品と同様に表現されているのではないだろうか。

芥川が「我」のままに生きる在り方に意味を見出していたことはわかったが、それでは自らの生き方を貫いた姫君の魂の結末は、余りに理不尽であるようにも思われる。いつまでも朱雀門の付近で歎きの声を響かせ続ける姫君の魂の描写は、誰がどう見ても、地獄に堕ちる以上の苦しみを与えられているように感じられるのだ。つまりは姫君の苦しみが、地獄や極楽といった概念如きでは到底及ばないものであるということになるが、そのような結末を用意した背景には芥川のどのような思いがあったのだろう。

以下に、長いながらも「侏儒の言葉」（「文芸春秋」大正 12.1～14.9、11、昭和 2.10）にみられる三項目を引用する〈34〉。

> 人生は狂人の主催に成ったオリンピック大会に似たものである。我我は人生と闘いながら、人生と闘うことを学ばねばならぬ。こう云うゲエムの莫迦莫迦しさに憤慨を禁

じ得ないものはさっさと埒外に歩み去るが好い。自殺もまた確かに一便法である。しかし人生の競技場に踏み止まりたいと思うものは創痍を恐れずに闘わなければならぬ。（「人生　―石黒定一君に―」 p 169）

人生は地獄よりも地獄的である。地獄の苦しみは一定の法則を破ったことはない。たとえば餓鬼道の苦しみは目前の飯を食おうとすれば飯の上に火の燃えるたぐいである。しかし人生の与える苦しみは不幸にもそれほど単純ではない。目前の飯を食おうとすれば、火の燃えることもあると同時に、また存外楽々と食い得ることもあるのである。のみならず楽楽と食い得た後さえ、腸加太児の起ることもあると同時に、また存外楽楽と消化し得ることもあるのである。こう云う無法則の世界に順応するのは何びとにも容易に出来るものではない。」（「地獄」 p 178）

人生を幸福にするためには、日常の瑣事を愛さなければならぬ。雲の光り、竹の戦ぎ、群雀の声、行人の顔、――あらゆる日常の瑣事の中に無上の甘露味を感じなければならぬ。人生を幸福にするためには？――しかし瑣事を愛するものは瑣事のために苦しまなければならぬ。・・・（略）・・・人生を幸福にするためには、日常の瑣事に苦しまなければならぬ。雲の光り、竹の戦ぎ、群雀の声、行人の顔、――あらゆる日常の瑣事の中に堕地獄の苦痛を感じなければならぬ。（「瑣事」 p 186-187）

芥川にとって、人生とは「狂人の主催に成ったオリンピック大会に似たもの」であり、しかもそのような人生を生きることは即ち「闘」いであって、更には「地獄よりも地獄的」なことであった。つまりは生きている限り、苦しみが絶え間なく続くという発想だったのである。地獄と異なり、人生には「一定の法則」というものがない。「無法則の世界」であるからこそ、生きる上では、どのような在り方を選択しようとも結局苦しみからは逃れられないのである。即ちそれは、姫君の何も選択しないという生き方を選んだ場合であっても、絶えず苦しみがもたらされるということであった。疑問に対する答えも、詰まる所はそういうことなのであろうか。

姫君は当然の如く、表面的にみると進んで人生と「闘」うことは望まない人物であった。けれども望まない、という姿勢もまた生き方の基準の決定に他ならないため、その意味で姫君は「地獄よりも地獄的」な「無法則の世界」の中に否応なしに留まり続けなければならない。当初は、芥川が友人に宛てた遺書の中で哀れを感じると述べた、何かをするために生きるのではなく、「生きる為に生きてゐる〔35〕」状態の姫君であったが、再認識をきっかけに「静かに老い朽ちたい」と願うようになるが、けれども乳母とは違って尼にならなかった。執着を持とうとしない姫君は、世俗を捨てるという選択を行わず、また同時にその必要性も見出していなかったのである。けれどもどのような在り方を選択しようと、人生を生きる限りは苦しみから逃れられない。結局のところ姫君は、「静かに老い朽ちたい」

という望みすら、世界の「無法則」さ故に叶わなかったのである。また、姫君が死んだ後もなお人生の苦しみから逃れられないのは、既にこの世に生まれてきた以上、抱え込んでしまった苦しみは、もはや死んだところで解決されはしない、ということなのであろうか。芥川にとっての不合理の根本は、生まれたことそのものであったように思われる。

芥川の晩年の作品の一つ「河童」(「改造」昭和 2.3) では、生存への問いかけが為されている。芥川は、河童の世界に託して家族制度をはじめとする人間社会の諸問題を語ることによって、そのような社会で生きることの容易でないことを、暗に示すのであった〈36〉。

> 僕はある時医者のチャックと産児制限の話をしていました。するとチャックは大口をあいて、鼻目金の落ちるほど笑い出しました。僕は勿論腹が立ちましたから、何が可笑しいかと詰問しました。……(略)……
> 「しかし両親の都合ばかり考えているのは可笑しいですからね。どうも余り手前勝手ですからね。」
> その代りに我々人間から見れば、実際また河童のお産ぐらい、可笑しいものはありません。……(略)……けれどもお産をするとなると、父親は電話でもかけるかのように母親の生殖器に口をつけ、「お前はこの世界へ生れて来るかどうか、よく考えた上で返事をしろ。」と大きな声で尋ねるのです。……(略)……すると細君の腹の中の子は多少気兼でもしていると見え、こう小声に返事をしました。
> 「僕は生れたくはありません。第一僕のお父さんの遺伝は精神病だけでも大へんです。その上僕は河童的存在を悪いと信じていますから。」
> バッグはこの返事を聞いた時、てれたように頭を掻いていました。が、そこにい合せた産婆はたちまち細君の生殖器へ太い硝子の管を突きこみ、何か液体を注射しました。すると細君はほっとしたように太い息を洩らしました。同時にまた今まで大きかった腹は水素瓦斯を抜いた風船のようにへたへたと縮んでしまいました。
>
> (「河童」 p 189-190)

ここで明らかとなるのは、芥川が究極的な意味において自己をつきつめようと試みた結果、胎児の生まれてくる権利までもを認めないと筋が通らないという考えにまで到達したということである。そうでないと誰しもが、意図せずしてこの「地獄よりも地獄的」な世界に生まれたことの責任の所在を、どこにも明確に見出せないと考えたのであろう。そのために芥川は、「六の宮の姫君」においても、何か「宿命のせんなさ」というキーワードを新たに用意せずにはいられなかったのである。

芥川は自らのあらゆる作品において、人生の苦痛を表現してみせている。初期の作品である「鼻」(「新思潮」大正 5.2) や、中期の「秋」(「中央公論」大正 9.4)、そして晩年の「歯車」や「或阿呆の一生」においても、芥川はこの世に生きることの苦しみを語っていた。言うなれば、芥川はその生涯をかけて、生きることの「娑婆苦〈37〉」をテーマに取り上げて

いたのである。けれどもそのような執拗なまでの「娑婆苦」を扱う姿勢は、実は芥川が本心の中では未だに希望を求めているということの裏返しであるようにも思われる。「或阿呆の一生」の最後を飾る五十一項目は「敗北」と題されており、その末尾には「彼はただ薄暗い中にその日暮らしの生活をしていた。言わば刃のこぼれてしまった、細い剣を杖にしながら。」という一文がみられる。芥川は心身が疲労困憊に陥ったこの瞬間においてでさえ、「敗北」と言いつつもまだ執筆作業を続けていたのである。これは、芥川本人でさえ意識していないところで、未だ生きる意味を求めてもがき続けようとしている証なのではないだろうか。そしておそらくはそのような人間の性に対して、芥川は悪い思いを抱いてはいなかった。にも関わらず、姫君は救われない結末を迎えてしまった。つまりは芥川自身が、選択しないことを選択する生き方という在り方を示すことで、ここに新たなひとつの挑戦を試み、結果としては救われないという結論を見出してしまったのであろう。

姫君の人生は、作品全体を表面的にみると「熱烈に意志しない」ようにもみえるが、しかしその内面では葛藤の思いが確かに存在していた。姫君は、良秀たち他の登場人物と同様に、普通とは一線を画した存在であったのである。むしろ、その異常性が明らかな良秀らと比べると今一つ分かり辛い異様さを含んでいるという意味で、丁寧に創りこまれた人物造形と言えるであろう。芥川によって生まれた新たな姫君の造形は、一見すれば慎ましやかで落ち着きのある、非常に素直で教養あふれた女性としても映る。このような姫君の、単純には認識できない異様さを極めた姿は、どの登場人物の中でも独特の存在を確立している。そのような、何も選択しない生き方を選び取るという、姫君の異様と捉えられる歪みは、究極の意味で極められれば、それもまた一見すると純粋なもののような独自の美しさを併せ持っているのである。

芥川は「今昔物語に就いて」(「日本文学講座」昭和 2.5）で、その「芸術的生命」が「生まなましさ」と「brutality（野生）の美しさ」、そして「優美とか華奢とかには最も縁の遠い美しさ」にあると論じている〔38〕。けれども今日においては、「皮肉なことに芥川が『今昔物語集』に取材した最期の作品『六の宮の姫君』は、『野生』とはほど遠い、『優美』で『華奢』な世界を造形していた。〔39〕」という評価が一般になされていた。しかし、このような見解は本当に正しいものとはいえないであろう。「六の宮の姫君」は、その物語に登場する姫君の人物像と同様に、その完成度の高さゆえにある種の歪みを美しさとして見誤らせる作品なのである。

結論

以上三章にわたって、「六の宮の姫君」における芥川の創作意図、および作品に込められた意味とその位置付けについての考察を行ってきた。これによって一体何が明らかとなったのか、以下にまとめることとする。

芥川は、作品から原話の帯びる出家機縁説話としてのはたらきを失わせることによって、純然たる姫君の没落する物語を描き出した。そこには、結末部分をオリジナル展開とすることによって、姫君の決して救われることのない歎きを如実に表そうとする意図があったのである。小説の姫君は、責められるべき愚かな存在としてではなく、いっそ憐れを感じずにはいられないような存在として、新たに創り上げられていたのだった。

そのような芥川独自の姫君像は、幼い頃より何かを積極的に求めることのない、異質な性質をもつ人物であった。作品の姫君は、〈変化〉のない「安らかさ」に意味を見出していたのである。けれども姫君の生きる世界は絶えず〈変化〉を繰り返す「無法則な世界」であるため、姫君の「安らかさ」は決して維持されることがない。つまり姫君は、この世界に生きている限り「安らかさ」を得ることが出来ないのであった。姫君も一度は〈変化〉を受け入れ男との婚姻を承諾するが、しかしその結婚生活も敢え無く崩れ去ってしまい、結局は、自分に新しいものは何も要らないということを再確認する。

そうして、どのような選択をしようとも所詮いつかは苦しみに陥るのだと察した姫君は、「生きようとも死のうとも一つ事」であるとして、「ただ静かに老い朽ちたい」と願い、遂にはどのような生き方も選ばないということを選択して、再婚の勧めを拒絶するのだった。けれども自らの性質のままに生きようとした姫君は、その最期の瞬間においても再び思わぬかたちで「無法則の世界」に裏切られ、「暗い中に風ばかり」吹く光景を見て息絶えたのち、「静かに老い朽ちる」ことなくその魂は永遠に現世で歎き続けることとなる。この小説は、実人生を生きる中で、自分の本来持ち合わせている人間としての生き方を貫こうとした時こうならざるをえなかった姫君の生き方を、最後まで描き切った作品なのであった。と同時に、以上のような姫君の物語は、生きることに対する姫君の情熱そのものの消滅を語るのではなく、むしろ苦しみからの脱却に喘いで葛藤を繰り返し、遂には自らの生き方を定めたものの苦しみからは逃れられないという、世間の本来の在り様を明らかにしているのである。

この小説以前に執筆された作品の多くは、多種多様な登場人物が、あらゆる独自の生き方を選択して人生を生きようとしていた。そして姫君の場合は、何を選んでも苦しいだけであるという認識から、何も選ばないという生き方を選択している点で、これまでの登場人物とはその性質を異にするといえる。そしてこの物語は、生き方を選ばなくとも苦しいだけであるという結末を描きだすことによって、厳しい現実世界に対する芥川の認識を露わにすると同時に、人生を「我」のままに生きようとする人間へと向けられた芥川の温かいまなざしをもみせているのである。この小説は、方向性を見失って生きている芥川が自

己を姫君に投影した作品などでは断じてなく、むしろ人生に対してどういう姿勢でのぞむべきなのか、芥川が模索を重ねる中で生みだした物語なのである。

ちなみに芥川はこの小説を最後に『今昔物語集』に取材した作品の執筆を止めており、その後は歴史小説としても目立った作品を残さなかった。代わってこの時期からは、広義の私小説とされる保吉もの[40]小説の最初を飾る「魚河岸」（「婦人公論」大正 11.8）を書きはじめている。そのような事実を踏まえると、「六の宮の姫君」は歴史小説から私小説へと作品傾向が転換する、重要な時期に位置した作品であったことがわかる。

むしろ芥川はこの小説を書き上げたからこそ、王朝もの小説の執筆にひとつの見切りをつけて、新たに自分自身の人生を見つめなおす作風に移行したのではないだろうか。このような転換期の発生は、芥川の創作態度の行き詰まりでも意欲の衰えでもない、「六の宮の姫君」が、究極の意味で生き方を突き詰めて、その結果として救われることはないという結論に至る、一つの試みの集大成となったことが、要因となったのである。そしてそのような点に、芥川が自選の『芥川龍之介集』の冒頭にあえて「六の宮の姫君」を掲げた真意をみることが可能であると思われるのである。

註

1 芥川龍之介の文学について語られる場合は一般的に、その題材によって「王朝もの」「切支丹もの」「保吉もの」「明治開化もの」などという便宜的な分類が行われている。ちなみに「王朝もの」のうち『今昔物語集』を典拠としている作品は、「青年と死と」(『新思潮』大正 3.9)、「羅生門」(『帝国文学』大正 4.11)、「鼻」(『新思潮』大正 5.2)、「芋粥」(『新小説』大正 5.6)、「運」(『文章世界』大正 6.1)、「偸盗」(『中央公論』大正 6.4)、「往生絵巻」(『国粋』大正 10.4)、「好色」(『改造』大正 10.10)、「藪の中」(『新潮』大正 11.1)、「六の宮の姫君」(『表現』大正 11.8) の合わせて十篇である。

2 『春服』(大正 12.5.18 春陽堂) は、大正十年から十一年までの約一年余りにわたって執筆発表された芥川の同時期の作品をほぼ網羅した単行本である。中には十五篇の作品が収録されており、一般的に、「『春服』は芥川文学前半期をしめくくる作品集であり、同時に後半期への過度的性格を幾分はらんだ問題の多い一巻である」(海老井 p 328) とみなされている。

3 『芥川龍之介集』(大正 14.4.1) は、新潮社版『現代小説全集』全十五巻のうちの第一巻である。収録作品は芥川の初期から大正十二年までの主な作品四十編で、『芥川龍之介事典　増訂版』によると、巻頭には著者の肖像と筆跡を置き、巻末には芥川自筆の「芥川龍之介年譜」を付している。ちなみに筆跡は、「人生は落丁の多い本に似てゐる。一部を成してゐるとは称し難い。しかし兎に角一部を成してゐる。」というもの。『現代小説全集』は大正期の文壇を代表する作家の自選による作品を並べた、まさに「傑作全集」と言われるもので、その第一回配本として芥川が当てられたことには、当時の芥川が占めていた地位が推し量られるだろう。

4 小学館の『新編日本古典文学全集 36　今昔物語集②』を参考。 p 458-466

5 小学館の『日本古典文学全集 5　萬葉集四』より引用。 p 122-123

6 原話の類本として『古本説話集』巻上第二十八話「曲殿姫君事(まがりどののひめぎみのこと)」がある。
これは、冒頭が「今は昔、五条わたりに、古宮原の御子、兵部の大輔なる人おはしけり。」となっている点、そして男の出家が語られた後の「出家ハ、于今始(いまにはじめ)ヌ機縁有ル事也」の言葉がないという点以外は、内容が原話とほとんど同じである。ちなみに「五条わたり」という表記からは、落ちぶれた貴族や女房が住む場所というイメージや『源氏物語』の夕顔が連想されるため、作中に登場する「陸奥」と「常陸」からは浮舟の母・中将の君が連想されることと併せて、作品と『源氏物語』や歌物語との関わりを論じる研究もみられた。しかし今回の考察においては据え置くこととする。

7 「或る女房、臨終に魔の変ずるを見る事」
ある宮腹の女房で遁世した者が、病によって死に臨むこととなり、聖を呼んだ。聖が念仏をすすめると女は顔を真っ青にして怖がり、訝しんだ聖が何か見えるのか尋ねると「恐しげなる者どもの、火の車を率て来るなり」と言う。そこで聖の勧めのままに念仏を唱えた女は、今度は嬉しそうに「火の車は失せぬ。玉のかざりしたるめでたき車に、天女

の多く乗りて、楽をして迎ひに来たれり」と言う。聖は「それに乗らんとおぼしめすべからず」と教えてただ唱仏に集中するよう諭すと、女は従い、暫くすると「玉の車は失せて、墨染めの衣着たる僧の貴げなる、只ひとり来たりて、『今は、いざ給へ。行くべき末は道も知らぬ方なり。我そひてしるべせん』と云ふ」と語る。僧が「ゆめゆめ、その僧に具せんとおぼすな。極楽へ参るには、しるべいらず」と言って再び念仏に専念するようすすめると、女は「ありつる僧も見えず、人もなし」と言ったので、僧はその隙に一心に念仏を唱えるよう教え、女は念仏を五六十ばかり唱えると声が終わらぬうちに息絶えた。「これも、魔のさまざまに形を変へて、たばかりけるにこそ。」

この説話には火の車と車に乗った天女の来迎が語られているが、これらは貴僧が現れて誘うことも含めて、全て往生を妨げる魔の化身と語られている。

なお新潮社の『新潮日本古典集成（第五回）　方丈記　発心集』より引用。p 182～184

8 小学館の『新編日本古典文学全集 37　今昔物語集③』より引用。p 564-566

9 小学館の『新編日本古典文学全集 36　今昔物語集②』より引用。p 134-137

10 長野甞一氏。『古典と近代作家―芥川龍之介―』より引用。p 417

11 原話との主な相違点は、以下の構図にまとめられる。

	「六の宮の姫君」	「六宮姫君夫出家語第五」
第一節	姫君についての説明	姫君についての説明
	姫君の両親の死	姫君の両親の死
	頼れる乳母	頼れない乳母
	姫君の婚姻	姫君の婚姻
第二節	男を頼りに暮らす姫君	男を頼りに暮らす姫君
	男が語る気味の悪い話 ※1	
	姫君と男の別れ	姫君と男の別れ
第三節	姫君側の話、姫君の再婚拒否	
	男側の話、新妻との会話	男側の話、妻を娶る
第四節	男の帰京	男の帰京
	男と老尼の会話	男と老尼の会話
第五節	姫君を探す男	姫君を探す男
	男と姫君の再会	男と姫君の再会
	唱仏をすすめる乞食法師	
	火の車と蓮華がみえると言う姫君 ※2	
	風吹く暗闇がみえると言う姫君	
	姫君の死	姫君の死（男を認めた瞬間に絶命）
第六節	乞食法師と侍の会話	男の出家
	乞食法師は高徳の沙門であった	出家は前世からの因縁である

※1　部分的な典拠は『今昔物語集』巻第二十六「東下者宿人家値産語第十九」

※2　部分的な典拠は『今昔物語集』巻第十五「造悪業人最後唱念仏往生語第四十七」および『発心集』巻四の七話「或女房臨終見変魔事」

12 小学館の『日本古典文学全集 18　和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』より「父、常陸に任ず、かたみに嘆きて別る」の章を参考。 p 318-320

13 ちなみにこの歌は、『拾遺和歌集』巻十四「恋四」に「よみ人知らず」として並んで載せられている六首のうちの一首である。

901　手枕の隙間の風も寒かりき身はならはしの物にぞ有ける

「かつて仲が親密であった時は、共寝をしている時の手枕の隙間さえ肌寒く感じたものだった。ところが、今は離別して、寒々と独り寝している。思えば、身は慣れ次第のものであったよ。」と「共寝と独り寝と境遇の変化を諦観する」歌と説明が付く。 p 259

14 以上のものは、あくまで古代後期から中世あたりに世間一般で広く知られていた極楽往生のイメージである。しかし本来の仏教的な極楽とは、成仏するために修行しに行く場所のことであった。

15 筑摩書房の『現代日本文学大系　芥川龍之介集』より引用。 p 419

16 三笠書房の『芥川龍之介の人と作』上巻より引用。 p 54

17 三省堂の『芥川龍之介』より引用。 p 224

18 有朋堂の『古典と近代作家―芥川龍之介―』より引用。 p 412.424

19『語文研究』24 号の「『六の宮の姫君』の自立性」より引用。 p 46

20 たとえば石井和夫氏が、「『六の宮の姫君』は芥川の精神的自画像にほかならない。」と述べている。 p 68

21 吉田精一氏。 p 224

22 長野甞一氏。 p 412

23『語文研究』24 号の「『六の宮の姫君』の自立性」を参考。 p 42-48

24 教育出版センターの『芥川龍之介の歴史小説　研究選書 30』より引用。 p 218

25 翰林書房の『芥川龍之介　文学空間』より引用。

26 勝倉壽一氏。 p 220

27 勝倉壽一氏。 p 221

28 筑摩書房の『芥川龍之介全集 5』「一夕話」を参考。

29 筑摩書房の『芥川龍之介全集 5』「文放古」より引用。

30 岩波書店の『芥川竜之介随筆集』より引用。

31 桜楓社の『芥川龍之介論攷―自己覚醒から解体へ―』より引用。

32 ともに筑摩書房の『芥川龍之介全集 6』より引用。

33「或阿呆の一生」十四「結婚」を参考。

34 筑摩書房の『芥川龍之介全集 7』より引用。

35『女性』大正十四年五月号（百七～百二十三頁）に第五回女性談話会として掲載された

座談会「女？」では、芥川龍之介の他に、田山花袋、長田幹彦、宇野浩二、里見弴と広報社員の根本茂太郎が出席して議論している。この中で芥川は、「何とかするために生活するのでなくつて、今は生活するために生活するようになつたのですね。」（p 83）という発言を残している。ちなみに進行役の根本氏が「いまの女の代表は何処にありませうか。以前ならば芸妓とか何とか、ありますね代表と云つたやうなものが、……」と言った際には、「今ではやはり良家の令嬢ですかね。」（p 76）と返している。

桜楓社の『芥川龍之介―近代文学資料 5―』の「芥川龍之介全集未収録資料」より

36 筑摩書房の『芥川龍之介全集 6』より引用。

37 筑摩書房の『芥川龍之介全集 6』「或阿呆の一生」の「出産」より引用。 p 457

38 筑摩書房の『芥川龍之介全集 7』を参考。

39 勉誠出版『芥川龍之介　全作品事典』より引用。 p 195

40「保吉もの」とは堀川保吉が登場する作品のこと。「魚河岸」（「婦人公論」大正 11.8）、「保吉の手帳から」（「改造」大正 12.1）、「お時儀」（「女性」大正 12.10）、「あばばばば」（「中央公論」大正 12.12）、「文章」（「女性」大正 13.4）、「寒さ」（「改造」大正 13.4）、「少年」（「中央公論」大正 13.4-5）、「十円札」（「改造」大正 13.9）などが挙げられる。

参考文献一覧

『芥川龍之介全集 1』筑摩書房　1986.9.24　第一刷発行
『芥川龍之介全集 2』筑摩書房　1986.10.28　第一刷発行
『芥川龍之介全集 3』筑摩書房　1986.12.1　第一刷発行
『芥川龍之介全集 4』筑摩書房　1987.1.27　第一刷発行
『芥川龍之介全集 5』筑摩書房　1987.2.24　第一刷発行
『芥川龍之介全集 6』筑摩書房　1987.3.24　第一刷発行
『芥川龍之介全集 7』筑摩書房　1989.7.25　第一刷発行
『芥川龍之介全集 8』筑摩書房　1989.8.29　第一刷発行
石割透編『芥川竜之介随筆集』岩波書店　2014.3.14
石割透編『芥川竜之介書簡集』岩波書店　2009.10.16
馬淵和夫 国東文麿 稲垣泰一 校注・訳『新編日本古典文学全集 36　今昔物語集②』小学館 2000.5.20 初版発行
馬淵和夫 国東文麿 稲垣泰一 校注・訳『新編日本古典文学全集 37　今昔物語集③』小学館 2001.6.20 初版発行
小町谷照彦 校注『新日本古典文学大系 7　拾遺和歌集』岩波書店　1990.1.19 第一刷発行
三木紀人 浅見和彦 中村義雄 小内一明 校注『新日本古典文学大系 42　宇治拾遺物語　古本説話集』岩波書店　1990.11.20
小島憲之 木下正俊 佐竹昭広 校注・訳『日本古典文学全集 5　萬葉集四』小学館 1975.10.31 初版発行
藤岡忠美 中野幸一 犬養廉 石井文夫 校注・訳『日本古典文学全集 18　和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』小学館　1971.6.10 初版発行
三木紀人 校注『新潮日本古典集成（第五回）　方丈記　発心集』新潮社　1976.10.10
関口安義 庄司達也 編『芥川龍之介　全作品事典』勉誠出版　2000.6.1 初版発行
菊地弘 久保田芳太郎 関口安義 編『芥川龍之介事典　増訂版』明治書院　2001.7.10 増訂版発行
関口安義 編集・評伝『新潮日本文学アルバム 13　芥川龍之介』新潮社　1983.10.20
森本修『芥川龍之介―近代文学資料 5―』桜楓社　1974.11.5 初版発行
『現代日本文学大系 43　芥川龍之介集』筑摩書房　1968.8
堀辰雄「芥川龍之介論」『堀辰雄全集』版第四巻　1978.1　筑摩書房
室生犀星『芥川龍之介の人と作』上巻　1943.4　三笠書房
吉田精一『芥川龍之介』三省堂　1948.12 改訂初版
長野嘗一『古典と近代作家―芥川龍之介―』有朋堂　1967.4
海老井英次『芥川龍之介論攷―自己覚醒から解体へ―』桜楓社　1988.2.25
海老井英次「『六の宮の姫君』の自立性」『語文研究』24 号　1967.10
勝倉壽一『芥川龍之介の歴史小説　研究選書 30』教育出版センター　1983.6.10

佐々木雅發『芥川龍之介　文学空間』翰林書房　2003.9.21 初版第一刷
石井和夫「『杜子春』から『六の宮の姫君』へ―『罪と罰』と『今昔物語』の複合―」『香椎潟』52 号　2006.12